

常盤東ノ町古墳群

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

常盤東ノ町古墳群

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物建設工事に伴う常盤東ノ町古墳群の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

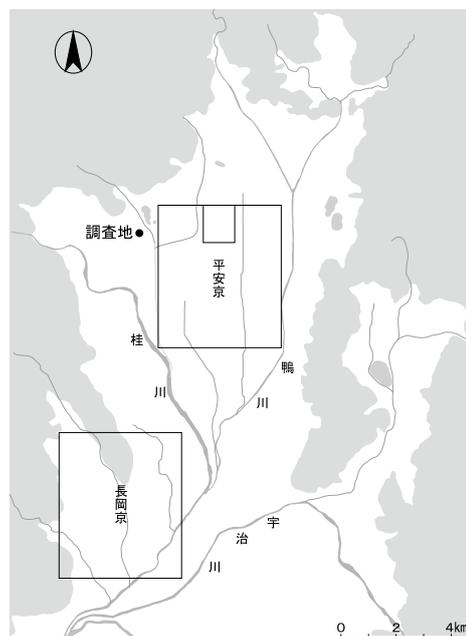
平成26年8月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 常盤東ノ町古墳群（文化財保護課番号 13 S 359）
- 2 調査所在地 京都市右京区太秦一ノ井町41番地55・56・60
- 3 委 託 者 社会福祉法人七施会 理事長 河合光男
田中弘一
- 4 調査期間 2014年2月17日～2014年4月11日
- 5 調査面積 456㎡
- 6 調査担当者 南 孝雄
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「宇多野」・「鳴滝」・「太秦」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 南 孝雄
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員および資料業務職員があたった。
- 15 協 力 者 調査・整理作業にあたっては下記の方々からご教示を頂いた。記して謝意を表します。（五十音順、敬称略）
網 伸也、宇野隆志、國下多美樹、高正龍、中島 正、西山良平、平尾政幸、三好孝一



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) 遺構の概要	9
(3) 1 区の遺構	10
(4) 2 区の遺構	13
4. 遺 物	27
5. ま と め	30
(1) 遺構の変遷	30
(2) 御室川扇状地北東部における遺跡の展開	30
(3) 結語	33

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1 区全景 (北から)
		2	1 区溝5 (北西から)
		3	1 区溝5 断面 (南東から)
図版2	遺構	1	1 区土坑51 半裁 (南から)
		2	1 区土坑52 (北から)
		3	1 区溝138 (西から)
		4	1 区落込み167 (東から)
図版3	遺構	1	2 区全景 飛鳥時代 (西から)
図版4	遺構	1	2 区全景 奈良時代から平安時代 (西から)
		2	2 区掘立柱建物1 (北西から)
		3	2 区柵1・5 (北東から)
図版5	遺構	1	2 区溝351 (北東から)
		2	2 区柵3 柱穴453 (東から)

		3	2区柱穴543（東から）
図版6	遺構	1	2区竪穴建物317（北東から）
		2	2区竪穴建物317カマド575（南東から）
		3	2区竪穴建物307（南西から）
図版7	遺構	1	2区竪穴建物341（北西から）
		2	2区竪穴建物341カマド576（南西から）
		3	2区竪穴建物341北壁溝土器出土状況（南東から）
図版8	遺構	1	2区竪穴建物422（北西から）
		2	2区竪穴建物422カマド573（南東から）
		3	2区竪穴建物369（東から）

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	2区調査前全景（東から）	2
図4	2区重機掘削状況（北東から）	2
図5	2区調査風景（北西から）	2
図6	2区現地公開風景（西から）	2
図7	京都盆地北部の扇状地（1：60,000）	4
図8	周辺調査地位置図（1：8,000）	6
図9	調査区断面模式柱状図（1：20）	9
図10	1区平面図（1：100）	11
図11	1区北壁及び東壁断面図（1：50）	12
図12	溝5・138、落込み173、土坑51・52実測図（1：40）	13
図13	2区平面図（1：100）	14
図14	2区遺構変遷図（1：150）	15
図15	2区東壁及び南壁断面図（1：50）	16
図16	柵1～5実測図（1：60）	17
図17	柱穴453・543実測図（1：20）	18
図18	掘立柱建物1実測図（1：60）	19
図19	掘立柱建物2実測図（1：60）	20
図20	掘立柱建物3実測図（1：60）	21

図21	掘立柱建物4実測図（1：60）	21
図22	竪穴建物307実測図（1：50、1：30）	22
図23	竪穴建物317実測図（1：50、1：30）	23
図24	竪穴建物341実測図（1：50、1：30）	24
図25	竪穴建物369実測図（1：50）	25
図26	竪穴建物422実測図（1：50、1：30）	26
図27	遺物実測図（1：4）	28
図28	2区柱穴543出土土師器杯	29
図29	周辺地形と遺構分布変遷図（1：20,000）	31

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	7
表2	遺構概要表	10
表3	遺物概要表	27

常盤東ノ町古墳群

1. 調査経過（図1～6）

今回の発掘調査は、社会福祉法人七施会（以下「七施会」という）の特別養護老人ホーム建設工事に伴う発掘調査である。調査地は、京都盆地北西部の嵯峨野と呼ばれる地域に位置する。中でもこの周辺は比較的多くの発掘調査が実施されており、主に古墳時代後期の古墳や飛鳥時代から室町時代の遺構・遺物が検出されている。

調査に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を行い、古代から中世の遺構・遺物の存在を確認し、七施会に対して埋蔵文化財調査の実施の指導を行った。公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が七施会から発掘調査の委託を受け、実施する運びとなった。

調査区は、文化財保護課が試掘成果に基づいて南北2箇所に設定することを指導し、北側の調査区を1区、南側を2区とした。1区は南北23m・東西12m、2区は南北9m・東西20mである。調査の過程で、2区の北西部で検出した竪穴建物317の規模を確定するため、調査区の一部を拡張した。

調査は平成26年2月17日から開始した。重機により盛土・耕作土などを掘削した後、地山上面

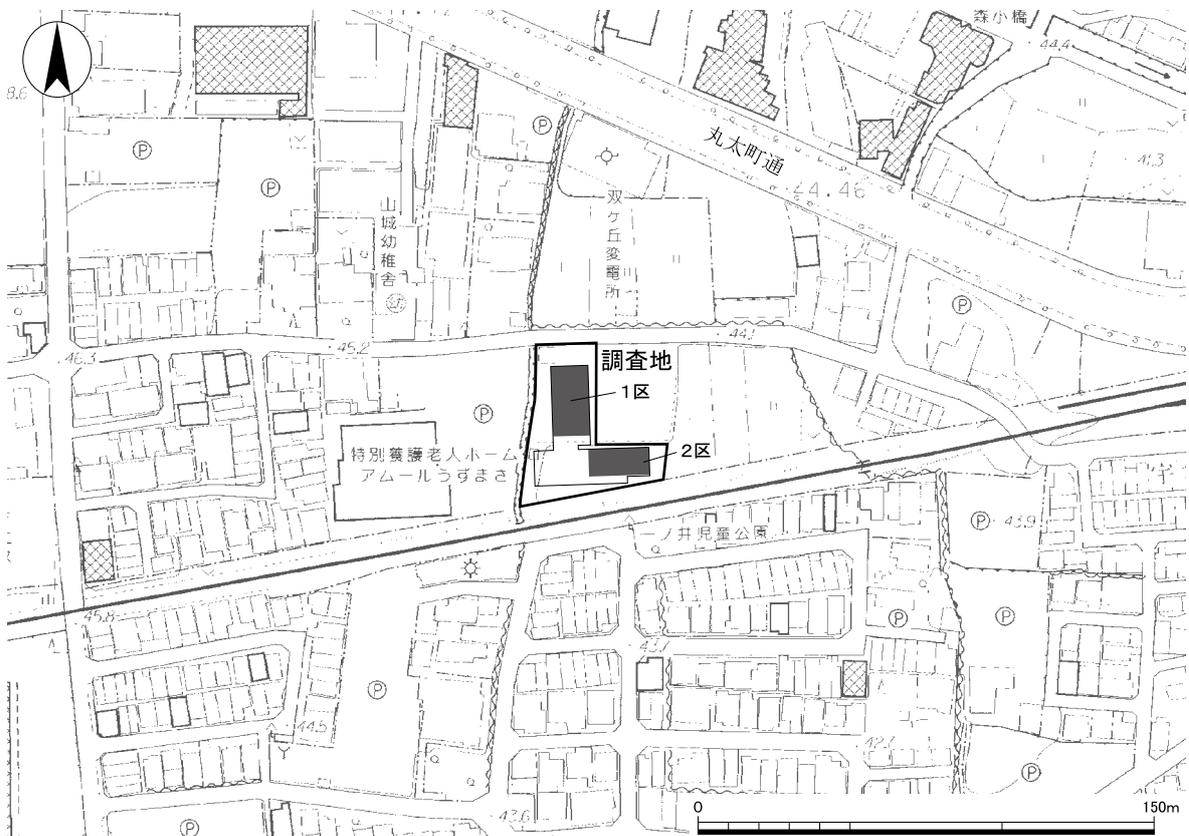


図1 調査地位置図（1：2500）

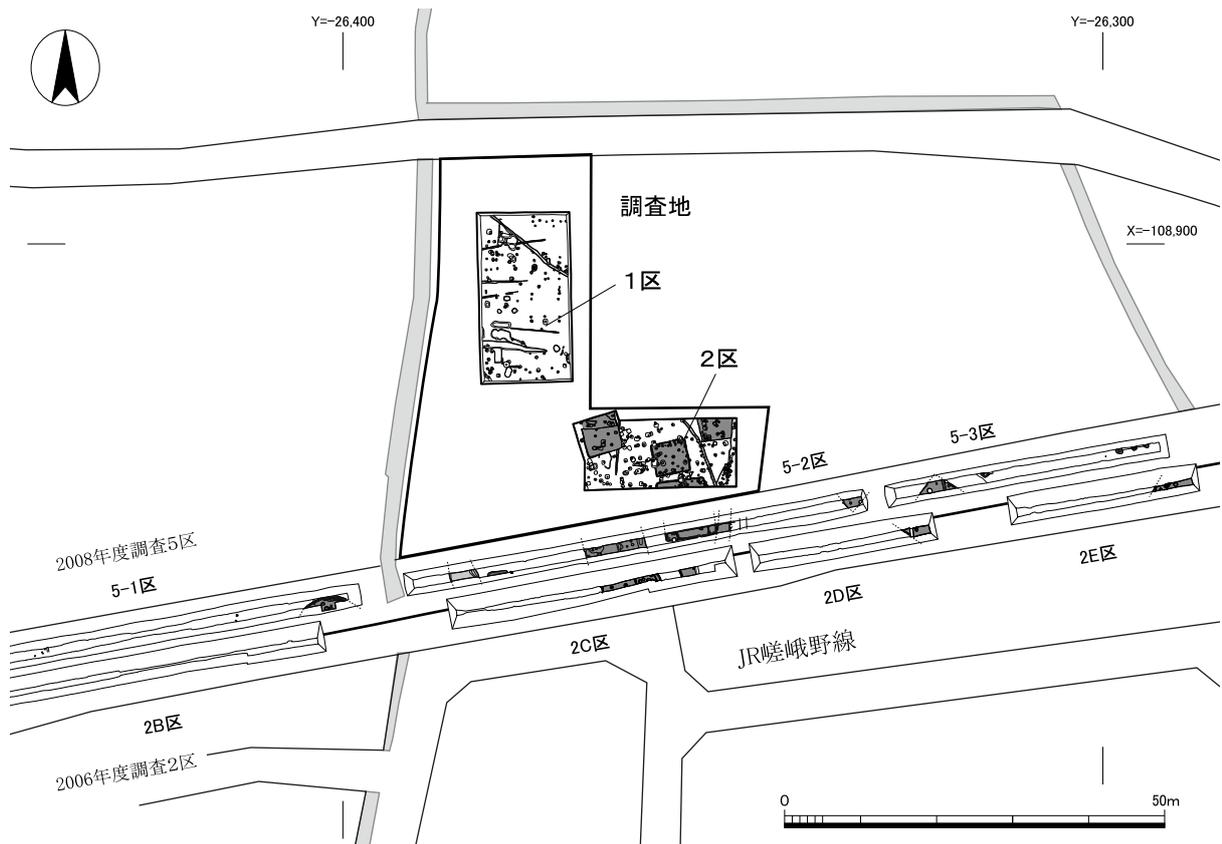


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)



図3 2区調査前全景 (東から)



図4 2区重機掘削状況 (北東から)



図5 2区調査風景 (北西から)



図6 2区現地公開風景 (西から)

で飛鳥時代から平安時代・室町時代の調査を行った。各種遺構の検出及び掘り下げを行った後、写真撮影・遺構実測などの記録作業を行い、平成26年4月11日にすべての現地作業を終了した。

なお、調査期間中の4月5日には地元住民向けの現地説明会を行い、多数の参加を得た。

調査では、飛鳥時代から平安時代・室町時代それぞれの時代の遺構・遺物を検出したが、なかでも飛鳥時代に成立し平安時代まで続く集落跡の確認は、主な調査成果として挙げられる。なお調査地は、遺跡地図上では常盤東ノ町古墳群の範囲に含まれるが、今回の調査では、古墳やこれに関連する遺構・遺物は検出していない。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境 (図7)

調査地は、京都盆地北西部の嵯峨野と呼ばれる地域の北東部に位置する。嵯峨野には、桂川とその支流である瀬戸川、有栖川、御室川が流れており、これらの河川によって形成された複数の扇状地が存在する¹⁾。調査地は、御室川の形成した扇状地上に立地している。御室川は京都市右京区梅ヶ畑蓮華谷の御経坂峠付近に発し、南東流して双ヶ岡の西麓を通り、そこから南流して吉祥院で桂川に合流する。御室川扇状地は、中央部付近に北東から南西方向の谷地形(京福電車鳴滝駅から帷子ノ辻駅間の路線に沿って東側)が存在しており、この谷地形を挟んで大きく東西2つに分かれる。調査地はこの西半部に位置する。御室川扇状地西半部の扇頂部標高は64m、扇端部標高は約30mで、調査地の標高は44m前後である。御室川扇状地は、北西から南東に向かって傾斜しているが、調査地から南へ約400mの三条通を境にして、南側ではやや傾斜が緩やかで低平な地形に変化していく。このため、三条通の南側から北側を望むと、地形は台地状に見える。調査地周辺には村ノ内町遺跡、常盤東ノ町古墳群、常盤仲之町遺跡、一ノ井遺跡、和泉式部町遺跡や推古11年(603)創建とされる広隆寺などが存在するが、これらはすべてこの台地状地形の上に展開する。

(2) 周辺の調査 (図8、表1)

これまで調査地周辺は、嵯峨野地域の中でも比較的多くの発掘調査が実施されているエリアになっている。中でも2006～2012年に行われたJR嵯峨野線の複線・高架化工事に伴う発掘調査と、市道城北街道拡幅工事に伴う発掘調査は、調査地周辺を東西南北の縦横に調査区を設定したこととなった。これらの調査によって、当地周辺では縄文時代以降、特に古墳時代後期から飛鳥時代を中心とした集落や古墳・古墳群、寺院などの遺跡が展開していること、そしてその歴史の変遷が明らかになりつつある。

縄文時代 北に位置する村ノ内町遺跡で土坑が検出され、中期末葉(北白川C式)の土器が出土した(調査31)。また、同調査では少量であるが、晩期の土器片も出土している。

弥生時代 村ノ内町遺跡では中期の遺構が確認されている。発掘調査(調査23・24)では竪穴建



扇状地凡例

- | | |
|--------------|--------------|
| A 有栖川 | W 若狭川 |
| O 御室川 | K 賀茂川 |
| T 天神川 | Ka 鴨川 |



図7 京都盆地北部の扇状地 (1 : 60,000)

物が1棟（畿内第Ⅱ様式）、立会調査（調査11・15）では土坑や流路・遺物包含層が確認されている。また、東側の和泉式部町遺跡でも発掘調査で中期（畿内第Ⅳ様式）の竪穴建物1棟が検出されている（調査16）。

古墳時代 和泉式部町遺跡では、前期の竪穴建物が14棟、中期の竪穴建物が7棟検出された（調査16）。中期の竪穴建物にはL字状に曲がる長い煙道を備えたものがあり、また初期須恵器や韓式系土器が出土するなど、朝鮮半島との強い関連が窺える。

嵯峨野地域では古墳の築造開始が、同じ山城北部の他地域にくらべて遅れることが知られており、西方にある中期末葉の仲野親王墓古墳（垂箕山古墳）が最初とされる。これ以降、嵯峨野地域の首長墓と考えられる大型の古墳は当地の周辺に展開する²⁾。特に後期後葉の双ヶ岡1号墳は当地周辺を一望できる双ヶ岡の最も高い一ノ丘に築かれた円墳（直径44m）で、巨石を用いた横穴式石室は南西方向に向けて開口している³⁾。また、後期には北嵯峨丘陵の南斜面を中心に多くの群集墳（円墳直径10～20m、横穴式石室）が営まれ、当地周辺では先の双ヶ岡においても一ノ丘南側から三ノ丘にかけて双ヶ岡古墳群が、平地部にも常盤東ノ町古墳群が展開する。常盤東ノ町古墳群は、これまでに少なくとも円墳17基を確認している（調査2・3・10・26）。また、周溝の可能性が考えられる溝や副葬品と考えられる遺物の出土（調査33）、広隆寺旧境内においても後期の埴輪が採取されていること（調査9）などから、周辺にはさらに壊された古墳が埋没している可能性が考えられる。

飛鳥時代 調査地の南西約200mには広隆寺が存在する。広隆寺は、同じ葛野郡内の北野廃寺（北区北野白梅町）とともに、史料に見える「蜂岡寺」や「葛野秦寺」との関連が指摘されている。この2つの寺院については、古くから、別寺院説、「葛野秦寺」から「蜂岡寺」への移転説、「葛野秦寺」と「蜂岡寺」の合併説がある。近年では、平安京遷都を契機とした合併説が有力となっており、広隆寺の始まりは、推古11年（603）に聖徳太子から仏像を与えられた秦河勝が創建した「蜂岡寺」と考えられている⁴⁾。ただし、創建当初の実態については調査例が少なく明らかではない。常盤仲之町遺跡（調査5・9・12・21・22・25・28・29）や村ノ内町遺跡（調査31）では、飛鳥時代の竪穴建物が多数検出されている。やや遺跡の範囲を広げてみると、西方の上ノ段町遺跡、多藪町遺跡、西野町遺跡などでも同時期の竪穴建物が多く検出されており、嵯峨野地域において人口の急増がみられる。また、広隆寺現境内での調査（調査9・12・22～24）では、飛鳥時代の竪穴建物が多数検出されているが、これらが寺院地に付属する竪穴建物か集落の一部であるのかどうかについては今後の検討課題である。

奈良時代以降 城北街道拡幅に伴う近年の調査により、この時期の状況が徐々に明らかになりつつある。常盤仲之町遺跡では、奈良時代の掘立柱建物（調査27）、平安時代の区画施設や建物・土坑・溝など（調査5・22・28・29）、鎌倉時代から室町時代の柱穴群や土壇墓群（調査27～29・32・33）が検出されている。その他、広隆寺やその子院に関係するとみられる門跡（調査33）や、城北街道西側溝とみられる南北溝（調査27・29・32）などが注目される。広隆寺旧境内でも平安時代以降の遺構が多数検出されている（調査6・12・13・17・19・21・30）。特に、調査12では平安

表1 周辺調査一覧表

No.	調査年度	方法	調査日	調査概要	文 献
1	1974	発掘	1974.11.01～ 1975.01.15	室町頃の土師器皿の出土する窯	『平安建設株式会社所有の双が岡西麓地に於ける埋蔵文化財発掘調査概要』『埋蔵文化財発掘調査概報集』羽鳥離宮跡調査研究所 1976年
2	1976	発掘	1976.10.26～ 1976.12.06	古墳後期の円墳3、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-I (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年
3	1976	発掘	1976.11.03～ 1976.11.15	古墳後期の円墳1、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
4	1976	発掘	1976.11.24～ 1976.12.07	平安の柱穴群・土坑2、弥生～古墳の遺物包含層、弥生土器・須恵器	『仁和寺子院跡』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1979-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
5	1976	発掘	1977.02.01～ 1977.06.10	飛鳥の堅穴建物24・建物4・溝、平安の建物4他	『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
6	1977	発掘	1977.05.03～ 1977.06.12	飛鳥の基壇、奈良～平安の建物、瓦	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
7	1977	発掘	1977.11.11～ 1978.02.11	芥天鳥経塚の調査。平安後期の経塚群、土師器・須恵器・白磁・軒瓦・金属製品・石製品	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
8	1977	発掘	1978.01.30～ 1978.02.18	室町の柱穴・土坑	『日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所新築に伴う発掘調査』『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
9	1979	発掘	1980.02.01～ 1980.03.31	飛鳥の堅穴建物、平安・鎌倉・室町の土坑、土師器・須恵器・輸入陶磁器・陶器・磁器・植輪	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
10	1979	発掘	1980.02.27～ 1980.03.15	古墳周溝、鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・瓦器・陶器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
11	1980	立会	1980.05.22	弥生の遺物包含層、弥生土器	『調査概要一覧表』『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年
12	1980	発掘	1980.10.20～ 1980.11.24	飛鳥の堅穴建物、平安中期の建物・柵・柱穴	『広隆寺跡-右京検察庁庁舎改築に伴う発掘調査の概要-』昭和55年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年
13	1981	発掘	1981.07.13～ 1982.03.12	飛鳥の土坑、平安時代の梵鐘鋳造遺構	『広隆寺跡』『京都府遺跡調査概報』第5冊-2 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年
14	1982	試掘	1982.08.09～ 1982.08.10	古墳後期～室町の土坑・遺物包含層、土師器・白磁	『調査概要一覧表』『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
15	1986	試掘立会	1986.11.21～ 1987.04.03	弥生中期の土坑・流路・遺物包含層、土師器・陶器・瓦	『調査概要一覧表 太秦地区』『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
16	1987	発掘	1987.05.06～ 1987.07.31	弥生中期の堅穴建物、古墳前・中期の堅穴建物・中期の韓式系土器	『和泉式部町遺跡』『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
17	1990	発掘	1991.03.19～ 1991.04.20	飛鳥の溝・柱穴・土坑、平安～室町の包含層	『広隆寺旧境内1』『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
18	1991	立会	1991.12.03～ 1991.12.05	平安前期の長方形土坑、須恵器	『調査概要一覧表 太秦地区』『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
19	1991	発掘	1992.01.12～ 1992.02.22	平安前期～中期の溝・土坑・柱穴、江戸の溝	『広隆寺旧境内2』『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
20	1992	試掘	1993.03.25	古墳の溝1、平安・鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・銭	『常盤東ノ町古墳群』『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
21	1993	発掘	1993.04.17～ 1993.05.31	飛鳥の堅穴建物・土坑、平安中期の溝・柱穴	『広隆寺旧境内』『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
22	1995	発掘	1996.01.11～ 1996.04.13	飛鳥の堅穴建物4、平安～江戸の遺構など	関西文化財調査会による発掘調査実績報告
23	2006	発掘	2006.01.20～ 2006.07.20	弥生の堅穴建物、飛鳥の堅穴建物、鎌倉の土壇墓・溝・柱列	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
24	2008	発掘	2008.04.11～ 2008.06.27	弥生の堅穴建物、飛鳥の堅穴建物・溝ほか	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
25	2008	発掘	2008.11.25～ 2009.01.14	飛鳥の堅穴建物ほか	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-17 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
26	2008	発掘(1次)	2008.11.10～ 2009.03.17	飛鳥の堅穴建物、古墳後期の横穴式石室ほか	『常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-20 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
27	2008	発掘(2次)	2009.01.20～ 2009.03.19	奈良の掘立柱建物、鎌倉～室町の土坑・溝・落込みほか	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-21 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
28	2009	発掘(3次)	2009.12.14～ 2010.03.12	飛鳥の堅穴建物、平安の区画施設・溝・土坑、鎌倉～室町の土坑など	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-16 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
29	2009	発掘(4次)	2009.12.14～ 2010.02.02	飛鳥の堅穴建物、鎌倉～室町の土坑など	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-18 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
30	2010	発掘	2010.05.06～ 2010.06.22	平安中期～後期の土坑・溝・柱列、中世の土坑・溝など	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-4 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
31	2010	発掘	2010.05.06～ 2010.06.10	縄文中期の土坑、飛鳥の堅穴建物・土坑、中世の建物・柱列・土坑など	『村ノ内町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
32	2011	発掘(5次)	2010.11.22～ 2011.03.11	飛鳥の堅穴建物・土坑・溝、平安中期の建物・井戸・土坑・溝、鎌倉～室町の土坑・溝・集石遺構など	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-15 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
33	2011	発掘(6次)	2010.11.28～ 2012.01.26	古墳以降の溝・土坑・落込、平安の溝、鎌倉～室町の柱穴・溝・土坑・土壇墓・門跡など	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-8 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2012年
34	2012	発掘(7次)	2012.8.13～ 2012.11.30	鎌倉～室町時代の溝・柵、門跡など	『常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-11 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2013年

※ No.は図8の調査地点の数字と対応

時代中期の建物跡、調査30では平安時代中期の区画溝や柵、儀式に使用されたと思われる遺物が多数検出されている。また、調査7では旧境内南東部にあった平安時代後期の「弁天島経塚」が調査された。一ノ井遺跡では、明確な遺構は検出されていないが、平安時代以降の遺物散布地として知られており、広隆寺を中心としたこの地域独特の遺構の広がりが認められる。

註

- 1) 石田志郎「京都盆地北部の扇状地 -平安遷都時の京都の地勢-」『古代文化』34巻12号 1982年
- 2) 丸川義広「京都盆地における古墳群の動向」『田辺昭三先生 古希記念論文集』2002年
- 3) 1980年に双ヶ岡全体が名勝公園として整備されるにあたり、発掘調査が実施された。調査後、石室内は崩落の危険を防ぐため、その内部に土嚢などを詰めて埋め戻され、保存されている。
『名勝双ヶ岡保存整備事業報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年
- 4) 朴 南壽『広隆寺史の研究』2003年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図9)

調査区の基本的な層序は、1・2区ともに、上から順に現代盛土、耕作土、中世整地層で、これ以下が無遺物層のいわゆる地山(基盤層)となる。遺構はすべて基盤層上面で検出した。基盤層の標高は、約40m離れた1区北壁と2区南壁の遺構面の高さは、ともに43.7m前後で高低差がほとんどない。周辺地形は、北西から南東へと低くなっており遺構面の状況とは異なっている。1・2区の基盤層直上には、室町時代の遺物を含む褐色砂泥を主とする土が、調査区のほぼ全面を水平に覆っている。1区と2区の遺構密度を比較した場合、2区のほうが高く1区が低い。このような土の堆積状況・遺構の分布・遺存状況をみると、土地の高い調査地北側を大きく削って土地を平坦化する作業が、室町時代以降に行われたものと考えられる。褐色砂泥層が耕土か否かは土質からは判然としないが、土地の平坦化の目的は、水田区画の整備に伴うものと考えられる。

地山の堆積物は、基本的には褐色砂泥を主とするが、扇状地地形を反映して径5~15cmの礫を多く含む部分もある。また2区の西半部では、地山の褐色砂泥が土壌化した黒褐色砂泥も確認している。この黒褐色砂泥は、飛鳥時代から平安時代の遺構の埋土となっており、本来は表土として調査区全面を覆っていたものと思われる。

(2) 遺構の概要 (図10・11・13~15、図版1・3・4)

検出した遺構の時期は、飛鳥時代から平安時代および室町時代で、鎌倉時代の遺構は存在しない。遺構には、室町時代の土坑、平安時代の柵・土坑・溝、奈良時代の掘立柱建物、飛鳥時代の竪穴建物や溝などがある。

室町時代の遺構は、1区の土坑52のほかにも検出したが数は少ない。

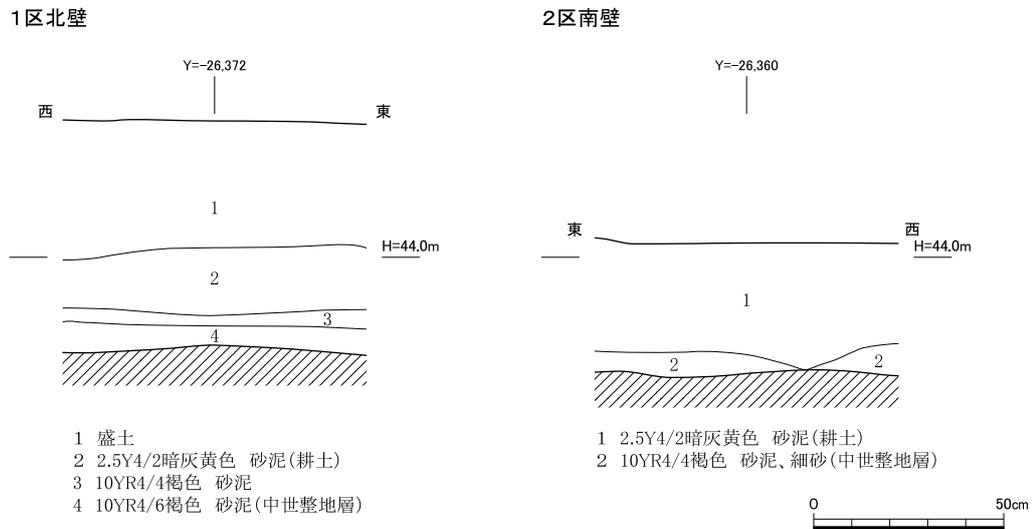


図9 調査区断面模式柱状図 (1:20)

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	
	1 区	2 区
飛鳥時代	溝 5	竪穴建物307・317・341・369・422、 土坑503、溝 5
奈良時代		掘立柱建物 1～4、柵 1
平安時代	柱穴91、土坑51、溝138、落込み167	柵 2～5、柱穴543、溝351
室町時代	土坑52	

平安時代の遺構には前期と後期のものがある。平安時代後期の遺構は、1区で柱穴91、土坑51や溝138などを検出した。1区では、柱穴91より北側では、径0.2～0.4mの柱穴をいくつか検出した。これらの柱穴は、形状や埋土からみて平安時代後期のもので、一部は中世と考えられる。建物が存在した可能性が高いが、復元することはできなかった。平安時代前期の遺構は、2区で柵2～5や溝351などを検出した。

奈良時代の遺構は、1・2区で柱穴や掘立柱建物を検出した。1区では、溝138より南側で柱穴を数個検出したが、散在的で建物として復元することはできなかった。2区では掘立柱建物4棟と柵1条を検出した。奈良時代の遺構の時期については、柱穴からの遺物の出土がほとんどなく確定し難かったが、飛鳥時代の竪穴建物の埋没後にその上面から柱穴が成立していること、2区で検出した平安時代前期の柵とは方位が異なることから奈良時代と考えた。

飛鳥時代の遺構は、1区では溝5を、2区では竪穴建物5棟と1区で検出した溝5の延長部分を検出した。

遺構方位は、平安時代前期を境にしてその前後で異なる。飛鳥時代から奈良時代は北に対して西へ振るが、平安時代以降は北に対して僅かに東へ振れる。飛鳥時代から奈良時代の遺構方位は、北西から南東へ下がる周辺地形に沿ったもので、平安時代以降は現在の周辺地割りに近いものになっている。以下では、検出した遺構について調査区ごと、時代順、種類別に述べていく。

(3) 1区の遺構 (図10・11、図版1)

室町時代の遺構

土坑52(図12、図版2) 調査区北東部で検出した。平面形は楕円形を呈し、径は南北0.9m、東西0.6m、深さ0.2mを測る。埋土の上層には5～10cmの礫を多く含む。13世紀後半の土師器皿が出土している。

平安時代の遺構

土坑51(図12、図版2) 調査区北東部で検出した。平面形は楕円形を呈し、径は南北0.8m、東西0.5m、深さ0.2mを測る。土坑の埋土は3層に分かれるが、第3層は土坑側面はほぼ垂直に立ち上がっており、板状のものが存在していた可能性が考えられる。12世紀後半の土師器皿が出土している。

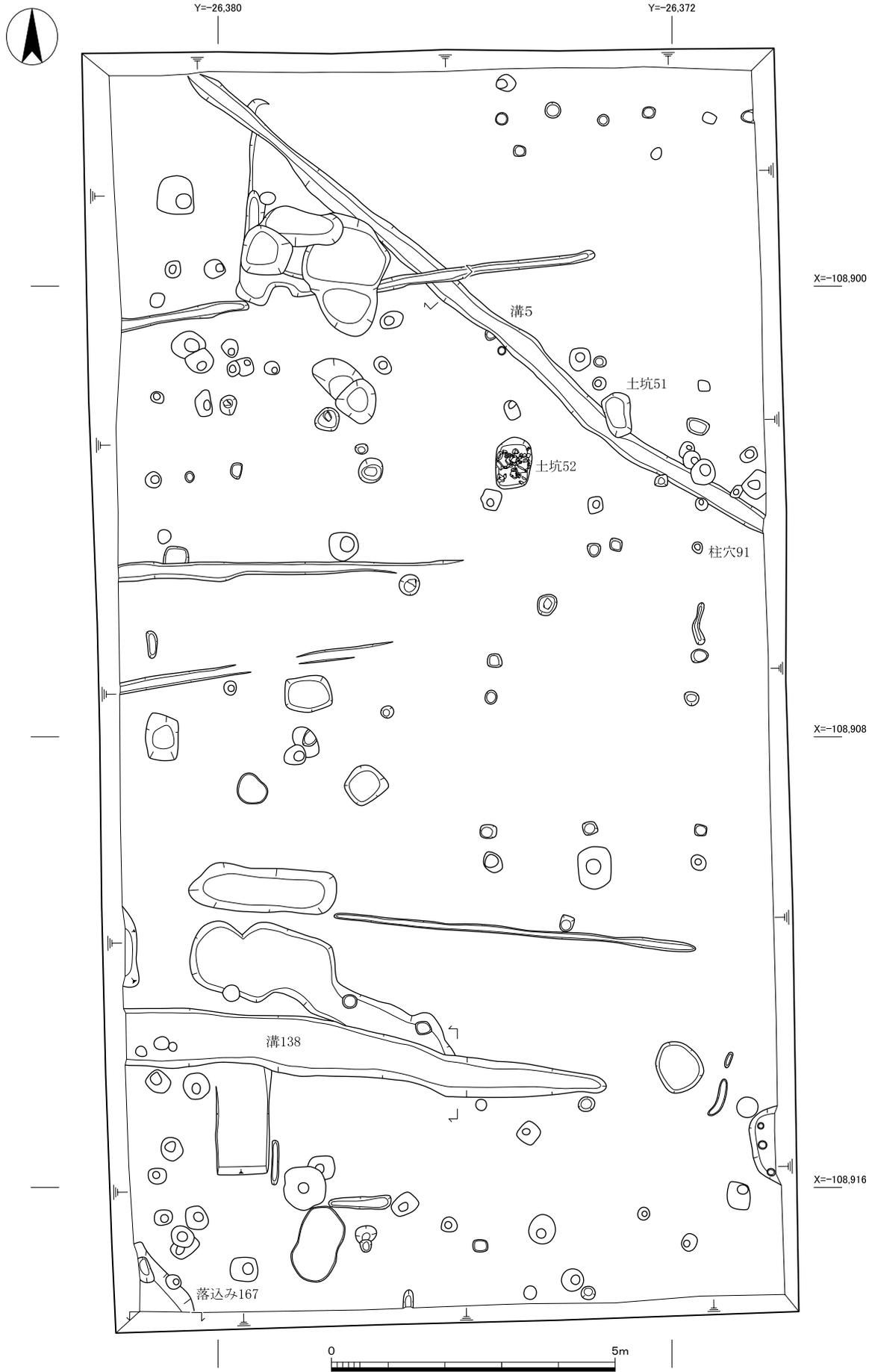
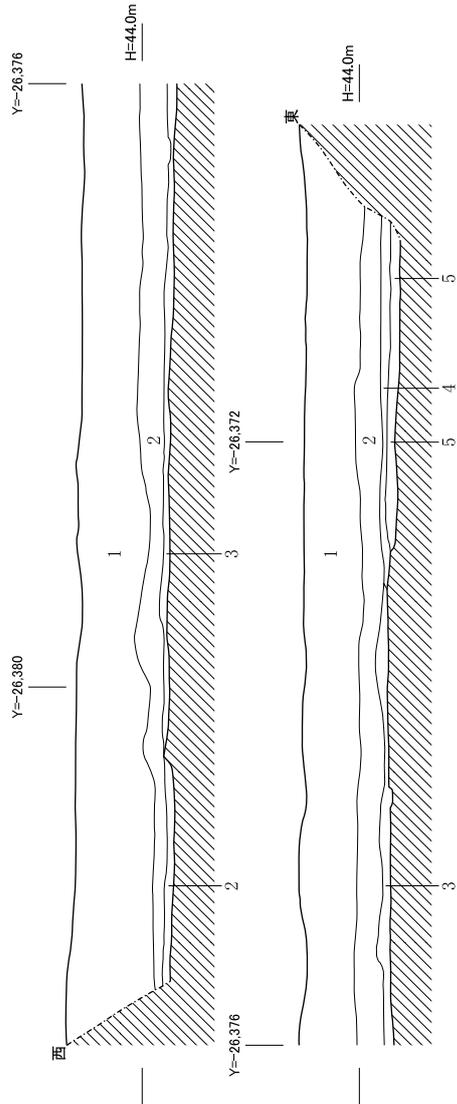


图10 1区平面图 (1 : 100)

1区北壁



1区北壁

- 1 盛土
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥(耕土)
- 3 10YR6/4にぶい、黄橙色 砂泥
- 4 10YR4/4褐色 砂泥
- 5 10YR4/6褐色 砂泥(中世整地層)

1区東壁

- 1 盛土
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色 砂泥(耕土)
- 3 10YR5/4黄褐色 砂泥(中世整地層)
- 4 2.5Y5/3黄褐色 砂泥(中世整地層)
- 5 7.5YR5/8明褐色 砂泥
- 6 10YR4/4褐色 砂泥(中世整地層)
- 7 10YR4/6褐色 砂泥(中世整地層)
- 8 10YR4/2灰黄褐色 砂泥 土師片含む
- 9 10YR2/3黒褐色 砂泥 φ0.5~3cmの礫混じり 土師片少量含む
- 10 10YR3/4暗褐色 砂泥 炭含む
- 11 10YR2/2黒褐色 砂泥(溝5)
- 12 10YR4/2灰黄褐色 砂泥(溝5)
- 13 10YR2/2黒褐色 砂泥+10YR5/2灰黄褐色 砂泥ブロック混じり(溝5)

1区東壁

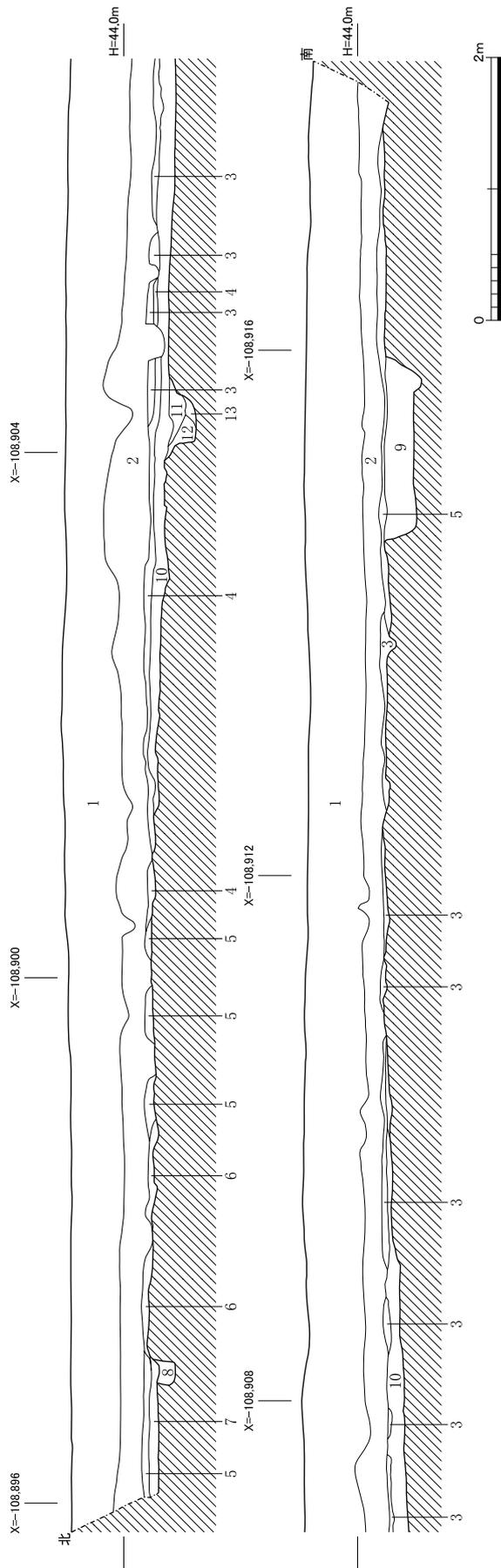


図11 1区北壁及び東壁断面図 (1 : 50)

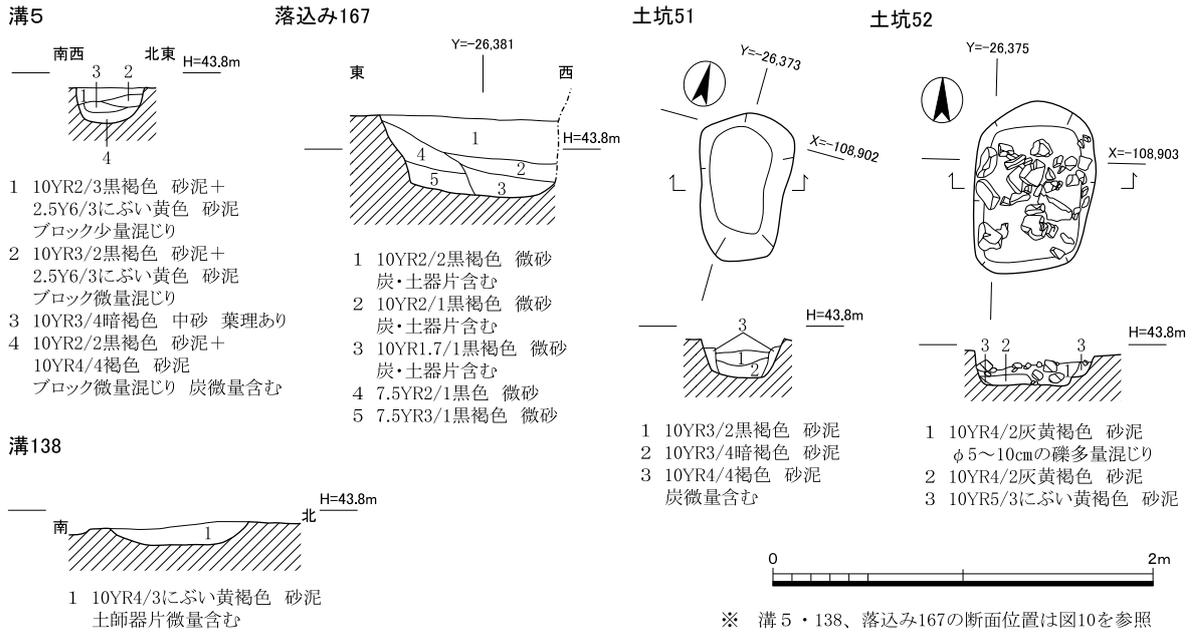


図12 溝5・138、落込み167、土坑51・52実測図（1：40）

溝138（図10・12、図版2） 調査区南半部で検出した。東西方向の溝で、検出長約8.5m、最大幅1.0m、深さ約0.1～0.2mを測る。埋土はにぶい黄褐色砂泥。西側は調査区外へと続く。平安時代後期の土師器の小片が出土しているが、埋土が中世の整地層に近く、時期が下がる可能性もある。

落込み167（図10・12、図版2） 調査区の南西隅部で検出した北東から南西へ下がる落込み。南北1.3m以上、東西1.0m以上、深さ0.4mを測り、調査区外へと続く。7世紀後半の須恵器が出土している。

飛鳥時代の遺構

溝5（図10・12、図版1） 調査区北部で検出した。北西から南東方向の溝で、検出長約13m、最大幅0.5m、深さ約0.1～0.2m。溝底は北西から南東側に低くなる。埋土は、溝底が黒褐色砂泥に褐色砂泥ブロックを含む土で人為的に埋められており、この上層に堆積する暗褐色中砂には流水による葉理が認められた。1区東壁断面や2区で検出した溝5の南東延長部では、このような堆積は認めることはできなかった。何らかの理由で低くなりすぎた溝底を、水の流れを一定にするため部分的に埋め戻したものと思われる。溝内からは、飛鳥時代と思われる土師器の小片が出土した。

（4）2区の遺構（図13～15、図版3・4）

平安時代の遺構

柵2（図16） 調査区南東部で検出した。南北方向の6間の柵で、南側は調査区外へと続く可能性がある。遺構の主軸方位は、北に対して東15°振れる。柱間は0.3～0.7mを測る。柱掘形の平面形は楕円形を呈し、径0.2～0.4m、深さ0.1～0.2mを測る。

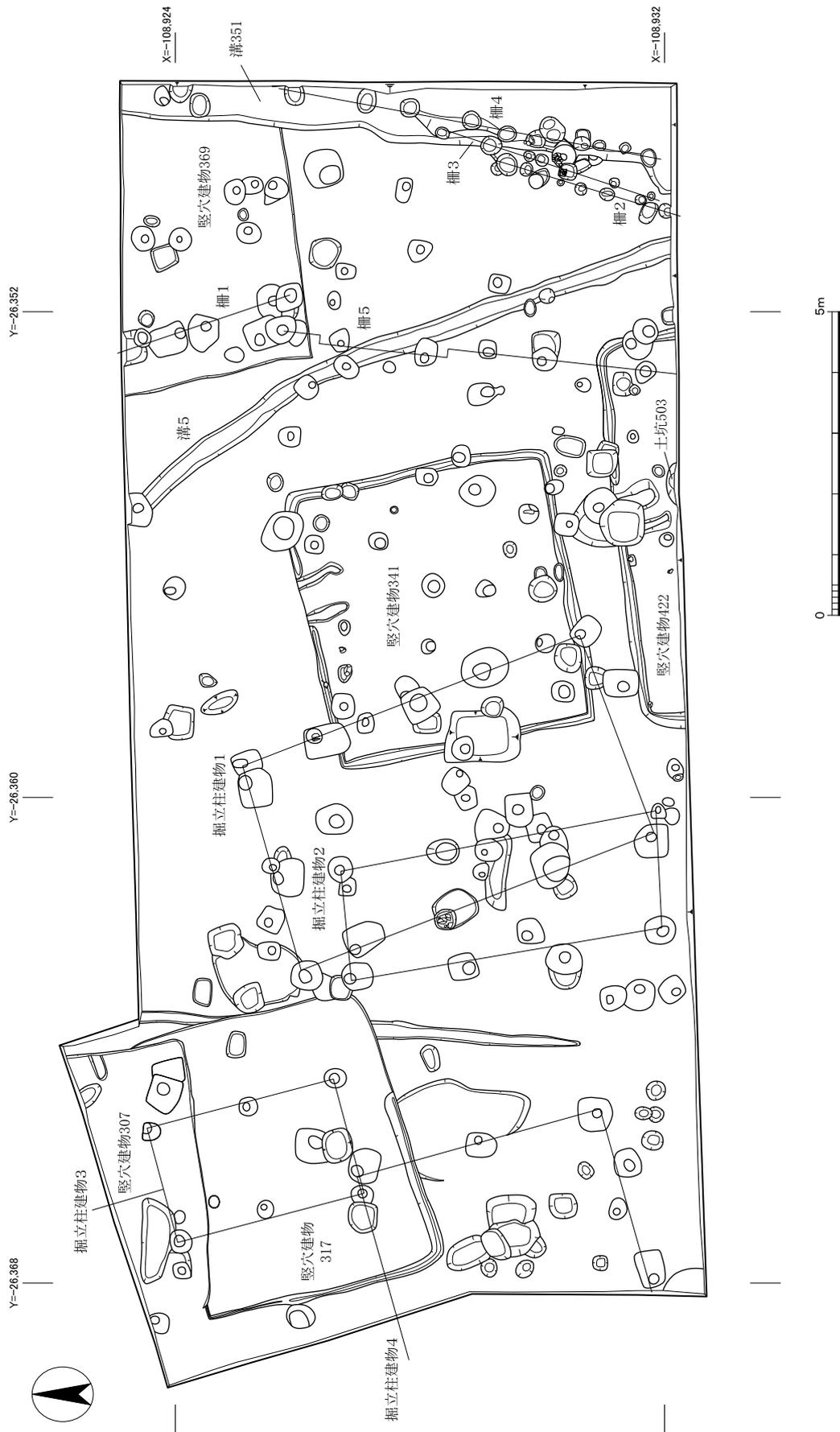
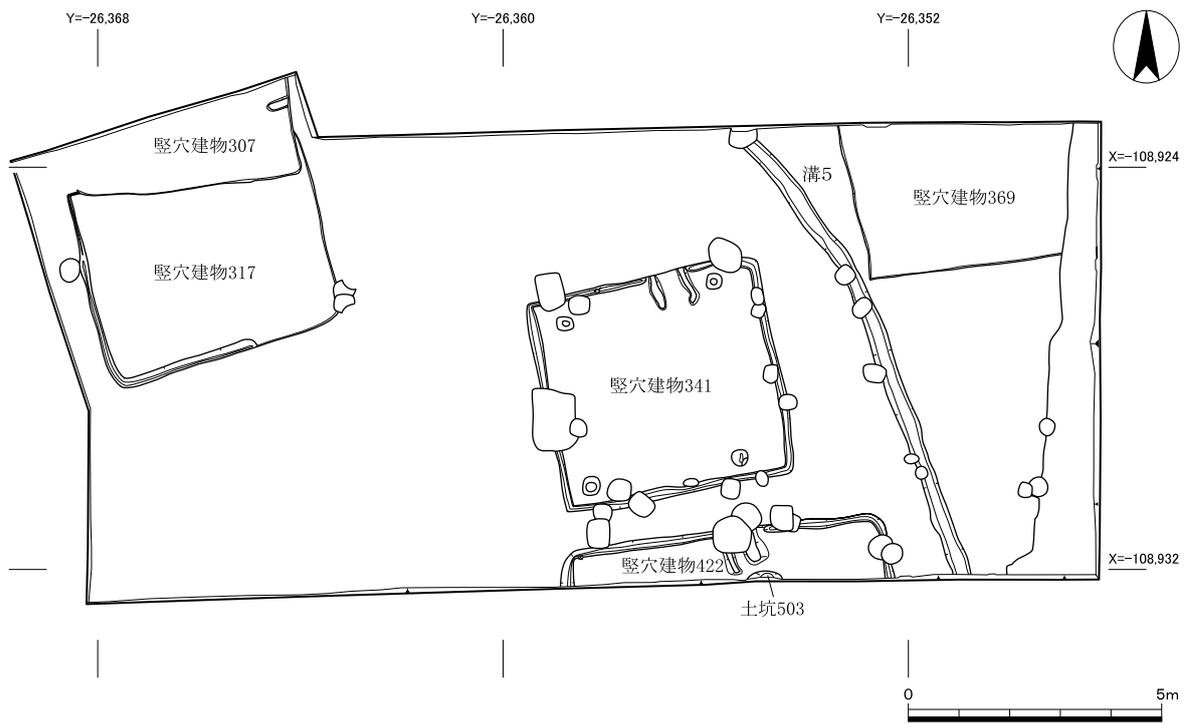
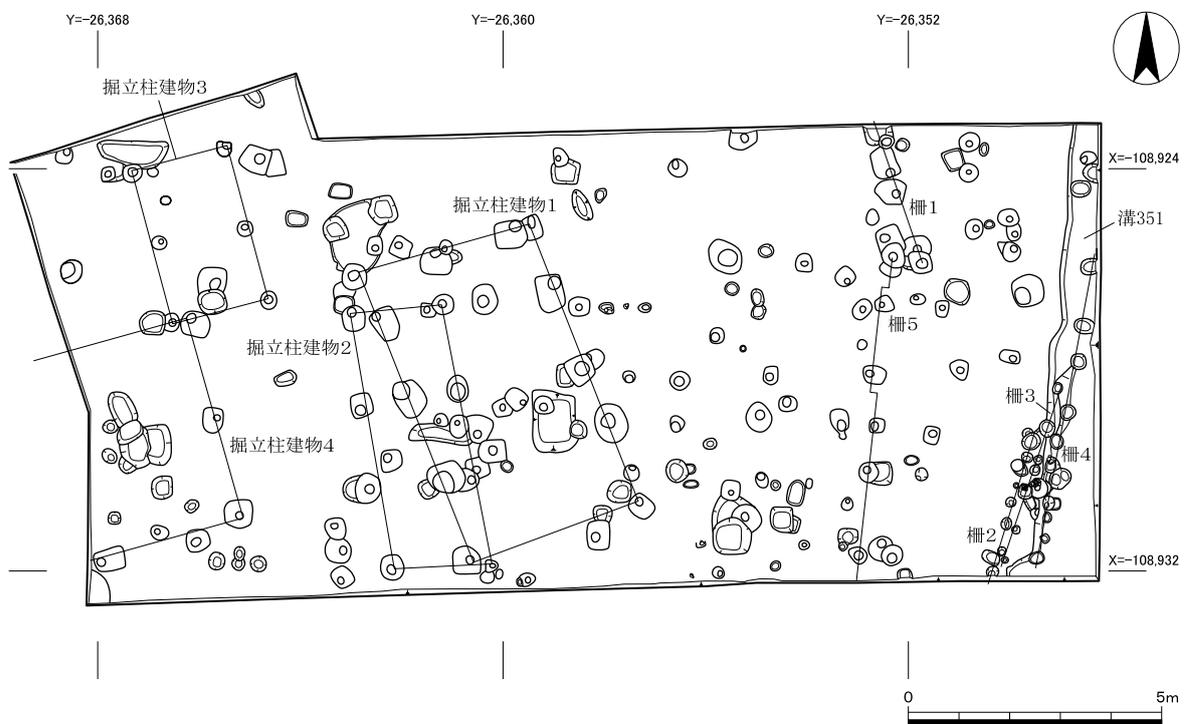


图13 2区平面图 (1:100)



飛鳥時代



奈良時代から平安時代

図14 2区遺構変遷図 (1:150)

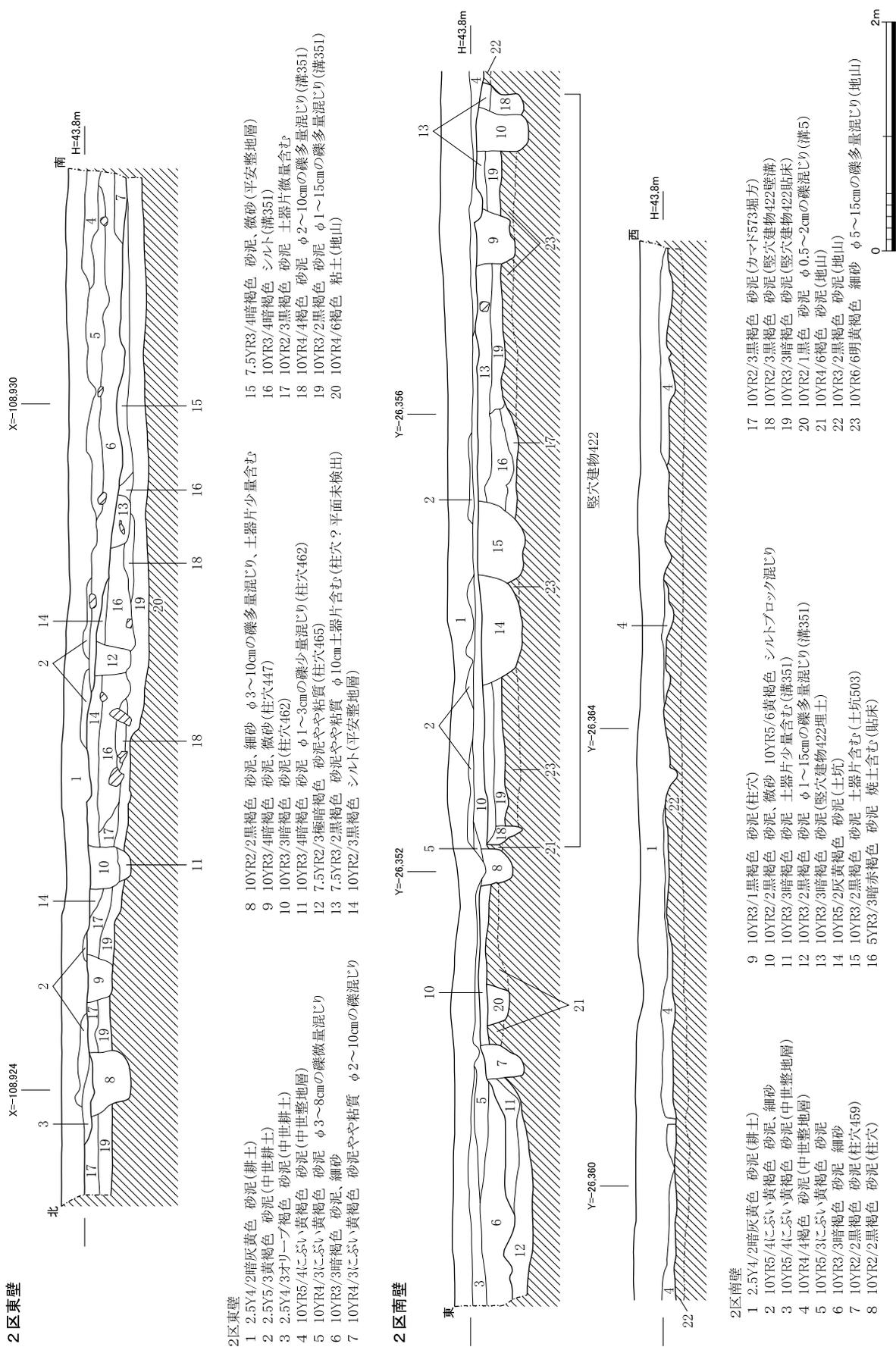


図15 2区東壁及び南壁断面図(1:50)

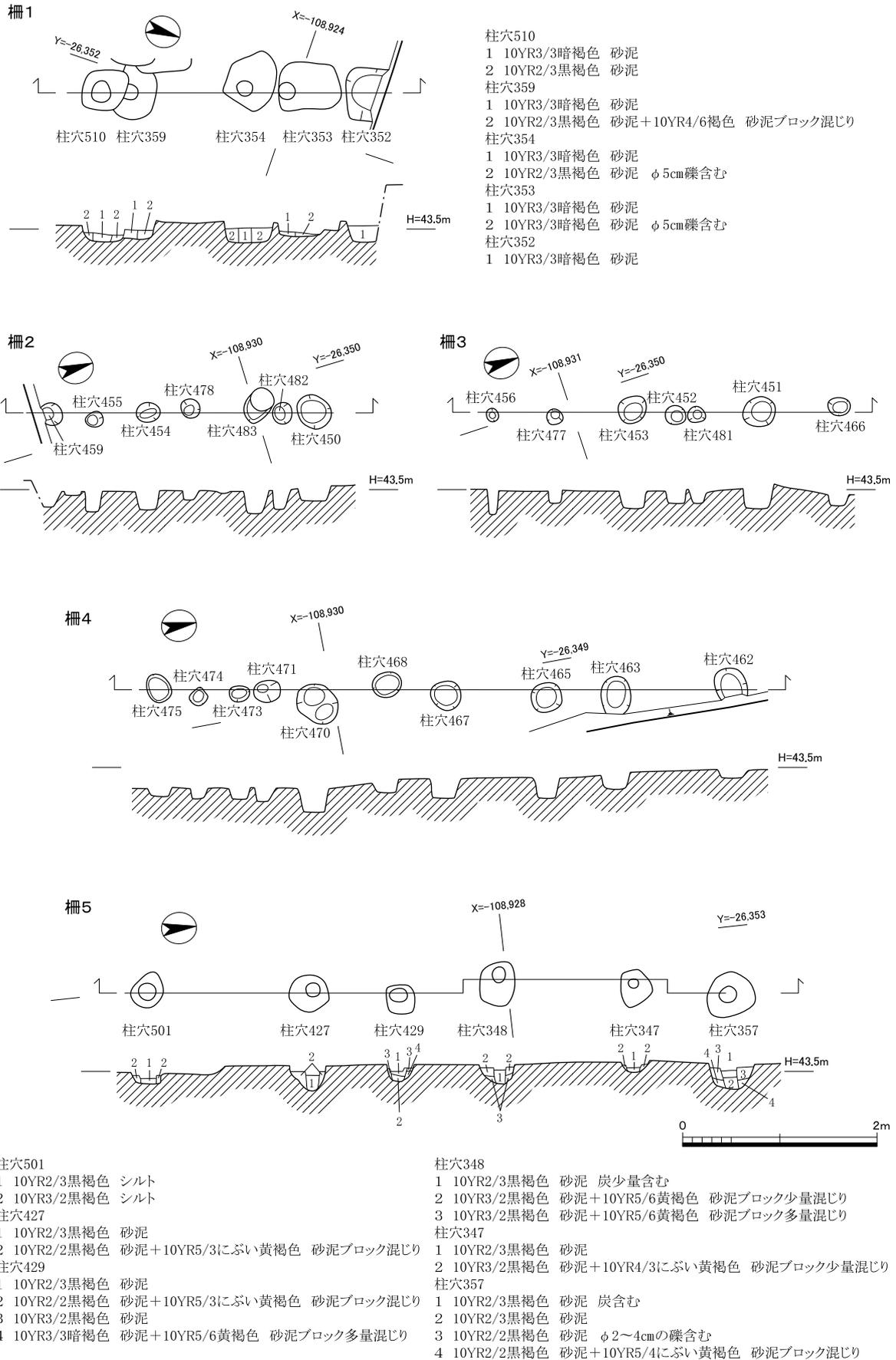


図16 柵1~5実測図(1:60)

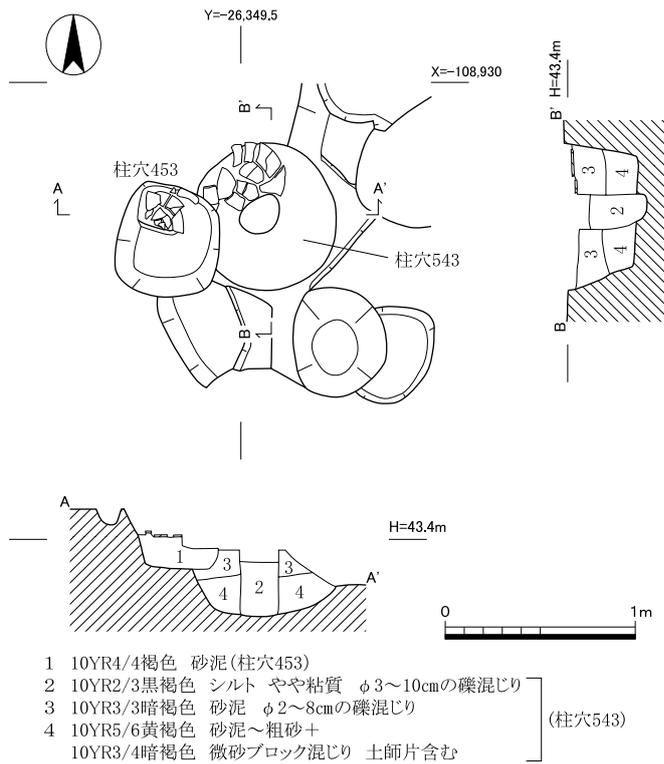


図17 柱穴453・543実測図(1:20)

いる。柵5の柱穴の検出は、溝351の掘り下げ後にその底面で確認したものが多いが、調査区東壁断面で溝351埋没後に柵4の柱穴が成立していることを確認している。

柵5(図16、図版4) 調査区南東部で検出した。南北方向の5間の柵で、南側は調査区外へと続く可能性がある。遺構の主軸方位は、北に対して東5°振れる。柱間は0.9~1.4mを測る。柱掘形の平面形は円形を呈し、径0.3~0.5m、深さ0.1~0.3mを測る。

柱穴453(図17、図版5) 柵3を構成する柱穴の一つ。柱掘形の平面形は隅丸方形を呈し、径0.3m、深さ0.15mを測る。掘形内からは9世紀中頃の完形に近い土師器杯が出土している。隣接する柱穴543からも9世紀前半の完形の土師器皿が出土しており、柵を敷設する際の祭祀に使用されたものの可能性が考えられる。

柱穴543(図17、図版5) 柵3と柵4の間で検出した。柱掘形の平面形は隅丸方形を呈し、径0.4m、深さ0.18mを測る。掘形内からは9世紀前半の完形の土師器杯が出土した。また検出面では土師器高杯の脚部も出土している。検出位置から柵を構成する柱穴の一つと思われ、土師器は柵敷設時の祭祀に使用された可能性が考えられる。

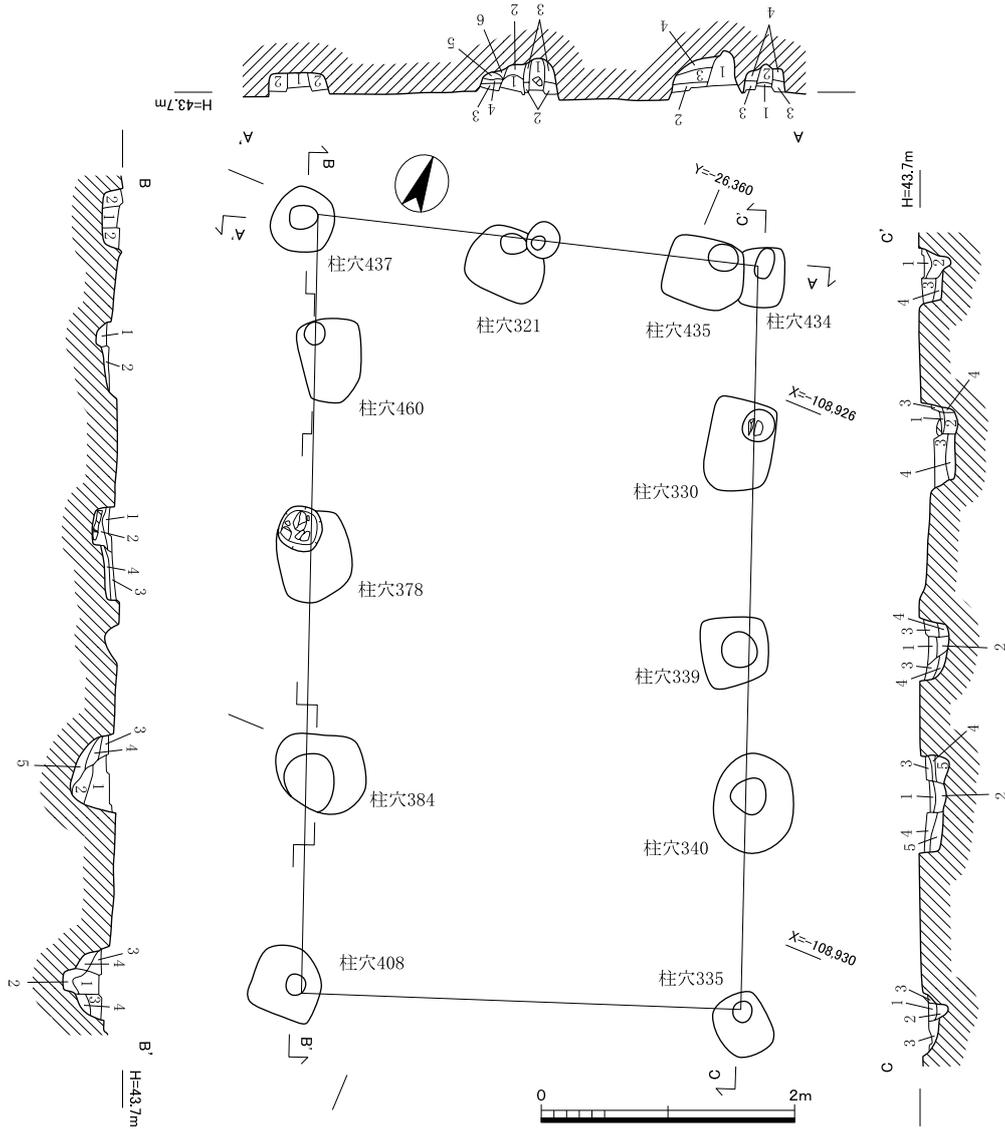
溝351(図13・15、図版5) 調査区東壁際で検出した。南北方向の溝。遺構の主軸方位は北に対して東へ振れる。幅1.5m以上、検出面から溝底までの深さは0.1~0.4mを測る。溝底は北から南へ低くなる。9世紀代の土器が出土している。

奈良時代の遺構

掘立柱建物1(図18、図版4) 調査区西半で検出した。梁行2間、桁行4間の南北棟掘立柱建物である。方位は北に対して23°西へ振れる。柱間は、梁行が1.5~1.95m、桁行が1.0~1.8mで

柵3(図16) 調査区南東部で検出した。南北方向の6間の柵で、南側は調査区外へと続く可能性がある。遺構の主軸方位は、北に対して東20°振れる。柱間は0.2~0.9mを測る。柱掘形の平面形は円形を呈し、径0.2~0.3m、深さ0.1~0.3mを測る。柱穴453からは9世紀前半の土師器杯が出土している。

柵4(図16) 調査区南東部で検出した。南北方向の9間の柵で、南北両側は調査区外へと続く可能性がある。遺構の主軸方位は、北に対して東10°振れる。柱間は0.2~0.8mを測る。柱掘形の平面形は円形を呈し、径0.1~0.3m、深さ0.1~0.2mを測る。柱穴465からは9世紀中頃の土師器碗が出土して



Aライン

柱穴434

- 1 10YR3/4暗褐色 砂泥
- 2 10YR2/3黒褐色 砂泥
+10YR4/4褐色 砂泥ブロック混じり
- 3 10YR3/4暗褐色 砂泥
- 4 10YR4/4褐色 砂泥

柱穴321

- 1 10YR3/4暗褐色 砂泥
- 2 10YR2/3黒褐色 砂泥
- 3 10YR3/4暗褐色 砂泥
土師片数個混じり
- 4 10YR3/3暗褐色 砂泥
+10YR4/6褐色 砂泥ブロック混じり
- 5 10YR2/3黒褐色 砂泥
- 6 10YR3/3暗褐色 砂泥

柱穴437

- 1 10YR3/4暗褐色 砂泥
- 2 10YR2/3黒褐色 砂泥
φ2~4cm礫数個混じり

Bライン

柱穴460

- 1 10YR3/2黒褐色 砂泥
φ1~3cm礫少量混じり
- 2 10YR5/6黄褐色 砂泥

柱穴378

- 1 10YR2/3黒褐色 砂泥
- 2 10YR3/4暗褐色 砂泥
φ5~10cm礫数個混じり
- 3 10YR3/2黒褐色 砂泥
- 4 10YR3/3暗褐色 砂泥

柱穴384

- 1 10YR2/3黒褐色 砂泥 土師片・炭微量混じり
- 2 7.5YR2/2黒褐色 砂泥
+10YR3/4暗褐色 砂泥ブロック混じり
- 3 10YR3/3暗褐色 砂泥
- 4 10YR2/3黒褐色 砂泥
- 5 10YR2/2黒褐色 砂泥
+10YR4/4褐色 砂泥ブロック混じり

柱穴408

- 1 10YR2/2黒褐色 砂泥
- 2 10YR2/3黒褐色 砂泥
- 3 10YR3/3暗褐色 砂泥
- 4 10YR2/2黒褐色 砂泥
+10YR4/4褐色 砂泥ブロック混じり
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色 砂泥
- 6 10YR4/4褐色 砂泥

Cライン

柱穴335

- 1 10YR3/3暗褐色 砂泥
+10YR4/4褐色 砂泥ブロック混じり
- 2 10YR3/3暗褐色 砂泥 土師片数個混じり
- 3 10YR4/4褐色 砂泥
φ0.5~4cm礫少量混じり

柱穴340

- 1 10YR3/4暗褐色 砂泥
- 2 10YR4/4褐色 砂泥
- 3 10YR2/3黒褐色 砂泥
- 4 10YR3/4暗褐色 砂泥
- 5 10YR4/4褐色 砂泥
+10YR3/4暗褐色 砂泥ブロック混じり

柱穴339

- 1 10YR2/3黒褐色 砂泥
- 2 10YR3/2黒褐色 砂泥
- 3 10YR3/3暗褐色 砂泥
+10YR4/4褐色 砂泥ブロック混じり
- 4 10YR3/4暗褐色 砂泥

柱穴330

- 1 10YR2/3黒褐色 砂泥 礫石混じり
- 2 10YR2/3黒褐色 砂泥
- 3 10YR2/3黒褐色 砂泥
+10YR4/4褐色 砂泥ブロック混じり
- 4 10YR2/2黒褐色 砂泥

図18 掘立柱建物1実測図 (1:60)

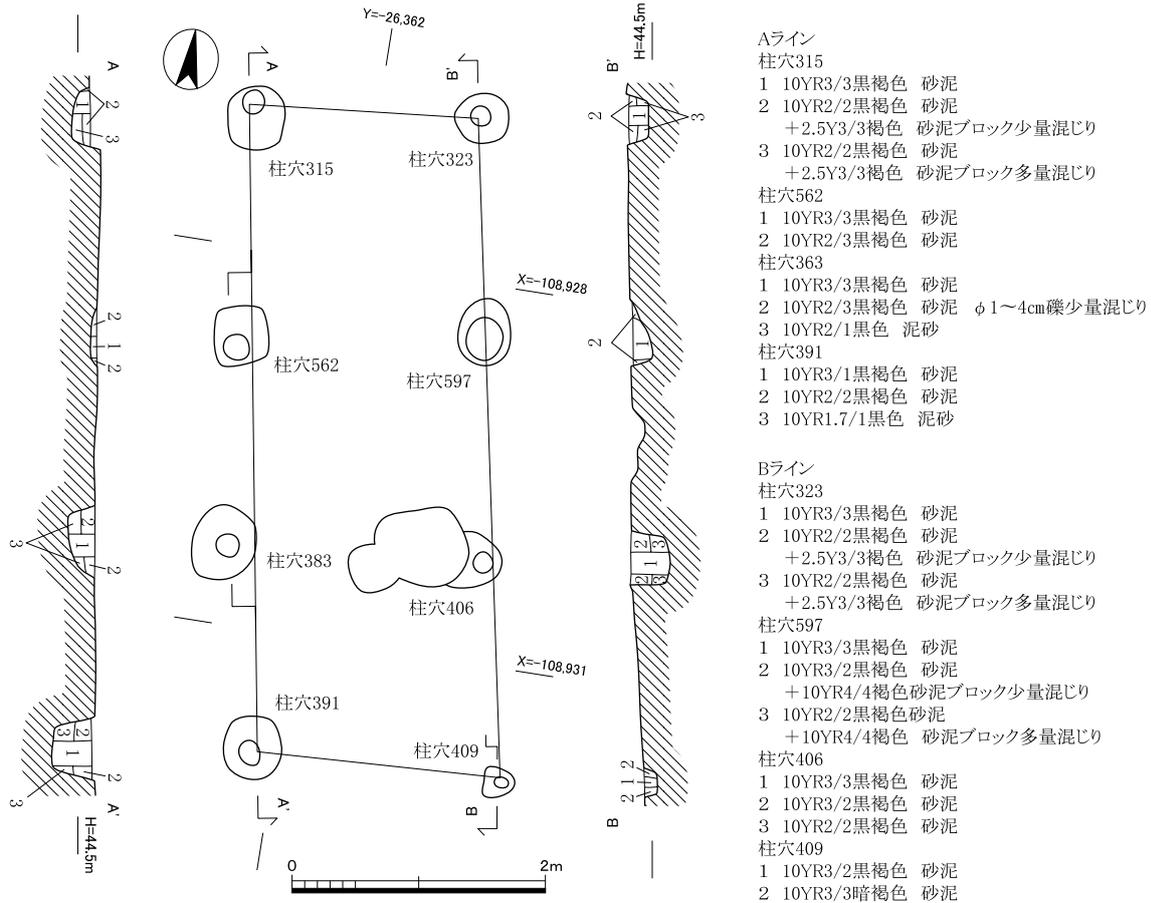


図19 掘立柱建物2実測図 (1 : 60)

ある。柱掘形の平面形は隅丸方形あるいは楕円形を呈し、径0.5～0.9m、深さ0.1～0.2mを測る。

掘立柱建物2 (図19) 調査区西半で検出した。梁行2間、桁行3間の南北棟掘立柱建物である。方位は北に対して10°西へ振れる。柱間は、梁行が1.8～2.0m、桁行が1.5～1.9mである。柱掘形の平面形は隅丸方形あるいは楕円形を呈し、径0.3～0.6m、深さ0.1～0.3mを測る。

掘立柱建物3 (図20) 調査区西半で検出した。梁行1間、桁行2間の南北棟掘立柱建物である。方位は北に対して15°西へ振れる。柱間は、梁行が1.9m、桁行が1.5～1.65mである。柱掘形の平面形は隅丸方形あるいは楕円形を呈し、径0.3～0.4m、深さ0.2～0.3mを測る。

掘立柱建物4 (図21) 調査区南西部で検出した。南北2間以上、東西1間以上の掘立柱建物である。方位は北に対して17°西へ振れる。柱間は、東西が2.4m、南北が1.7mである。柱掘形の平面形は隅丸方形を呈し、径0.5～0.6m、深さ0.15～0.2mを測る。

柵1 (図16、図版4) 調査区北西部で検出した。南北方向に3間の柵である。5つの柱穴を重複して検出しており、新古の2時期に分かれる。新段階は、柱穴352・354・510によって、古段階は柱穴353・359によって構成される。方位は、新古ともに北に対して西へ20°振れる。柱間は、新古段階ともに1.5mを測る。ただし、柱穴352については検出位置が壁際のために確認していない。柱掘形の平面形は隅丸方形あるいは楕円形を呈し、径0.4～0.6m、深さ0.1～0.2mを測る。柵1は、掘形規模が大きいことから建物の一部である可能性もある。

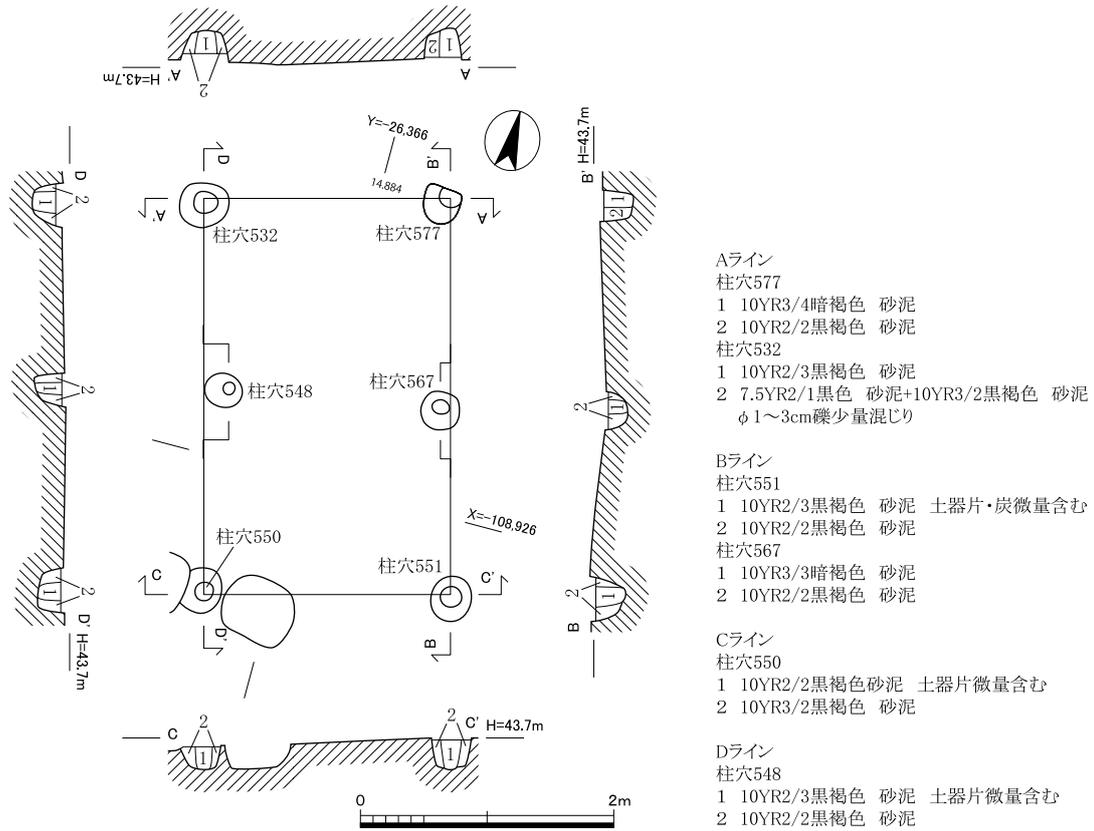


図20 掘立柱建物3実測図 (1 : 60)

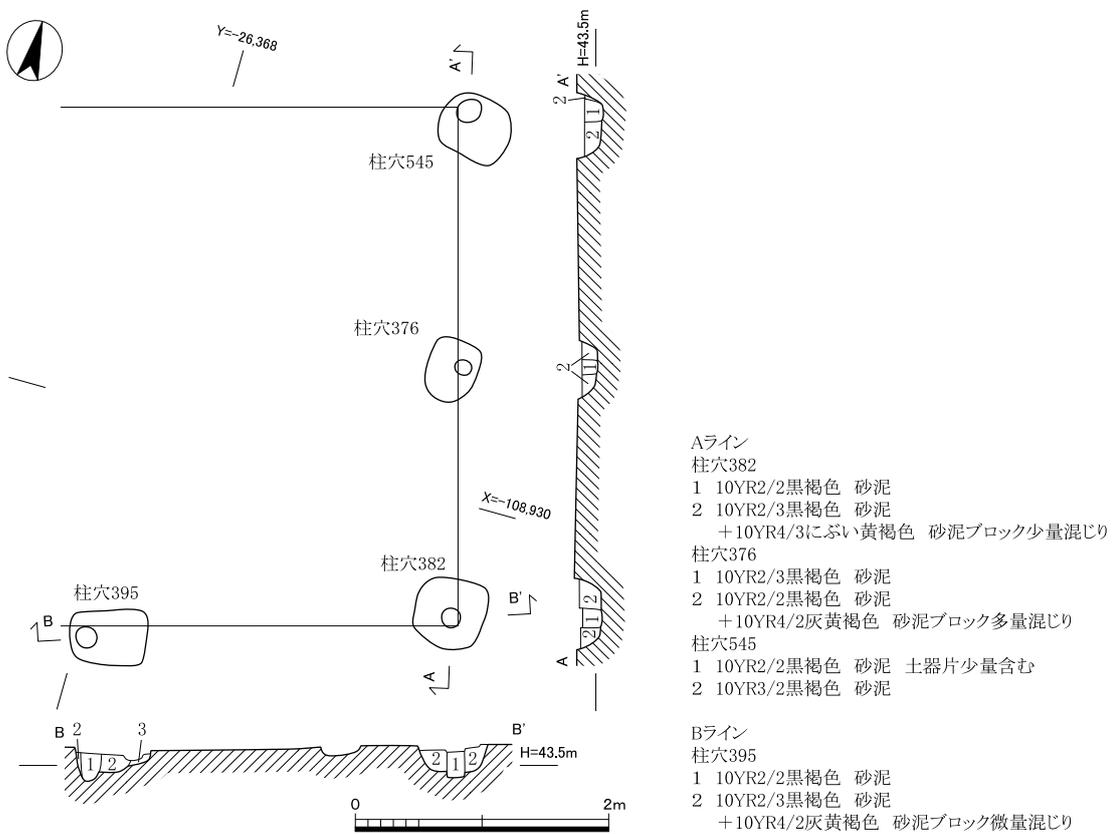


図21 掘立柱建物4実測図 (1 : 60)

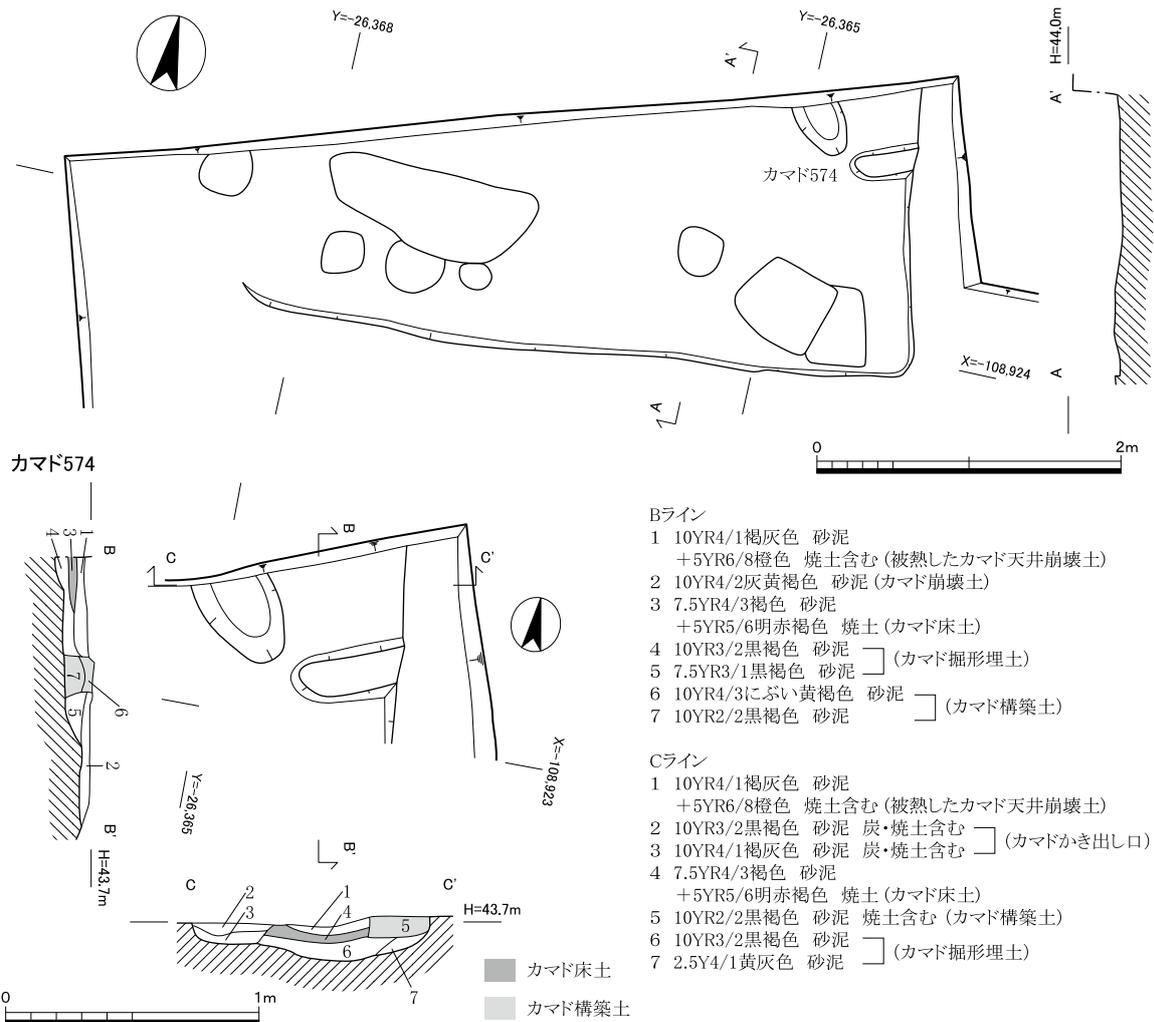


図22 竪穴建物307実測図(1:50、1:30)

飛鳥時代の遺構

竪穴建物307(図22、図版6) 調査区北西部で東壁と南壁の一部を検出した。後世の削平によって、南壁の西半と壁の立ち上がりも失われており、床面で検出した。平面形は方形を呈すると思われる。東壁の長さは、1.9m以上で北側は調査区外へと続く。南壁の残存長は4.5mである。方位は北に対して15°西へ振れる。主柱穴と壁溝は認められなかった。貼床は検出しなかった。2区で検出した5棟の竪穴建物の内、調査区北壁際に位置する竪穴建物307と369は、中世以降の削平の影響を大きく受けている。竪穴建物369にはわずかに貼床の痕跡が認められたことから、竪穴建物307も本来は貼床が施されていた可能性がある。検出面上面からは飛鳥時代の土師器甕が出土した。

東壁際ではカマド574の南半部分を検出した。基底部幅は0.58m以上、袖部の長さ0.45mを測る。掘形は東西0.65m、南北0.7m以上を測る。焚口付近には楕円形の窪みがあり、炭や焼土を含むことから掻き出し口と思われる。

竪穴建物317(図23、図版6) 調査区北西部で検出した。竪穴建物307に先行する竪穴建物である。後世の削平によって壁の立ち上がりは失われており、床面で検出した。平面形は東西が長い

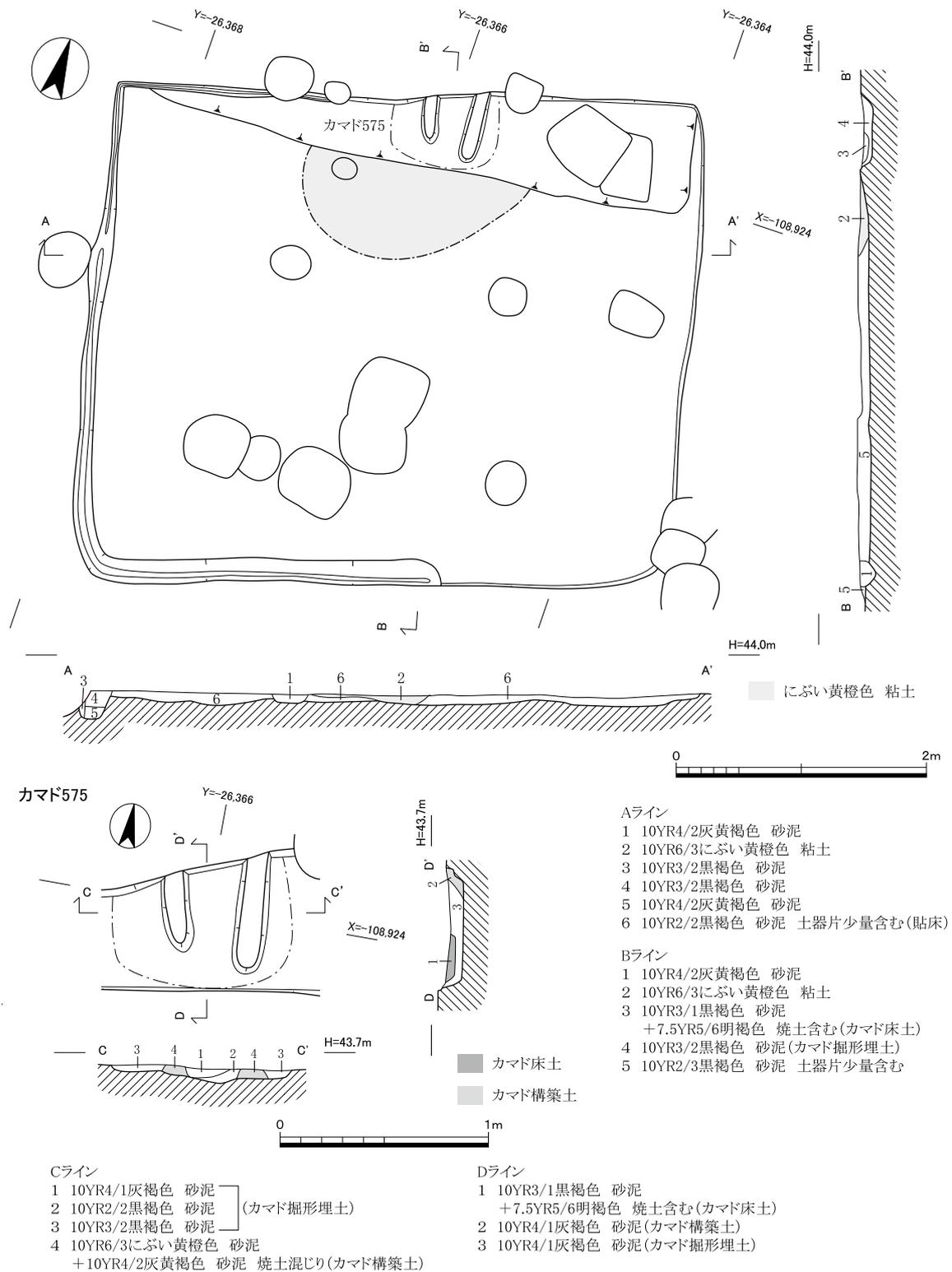
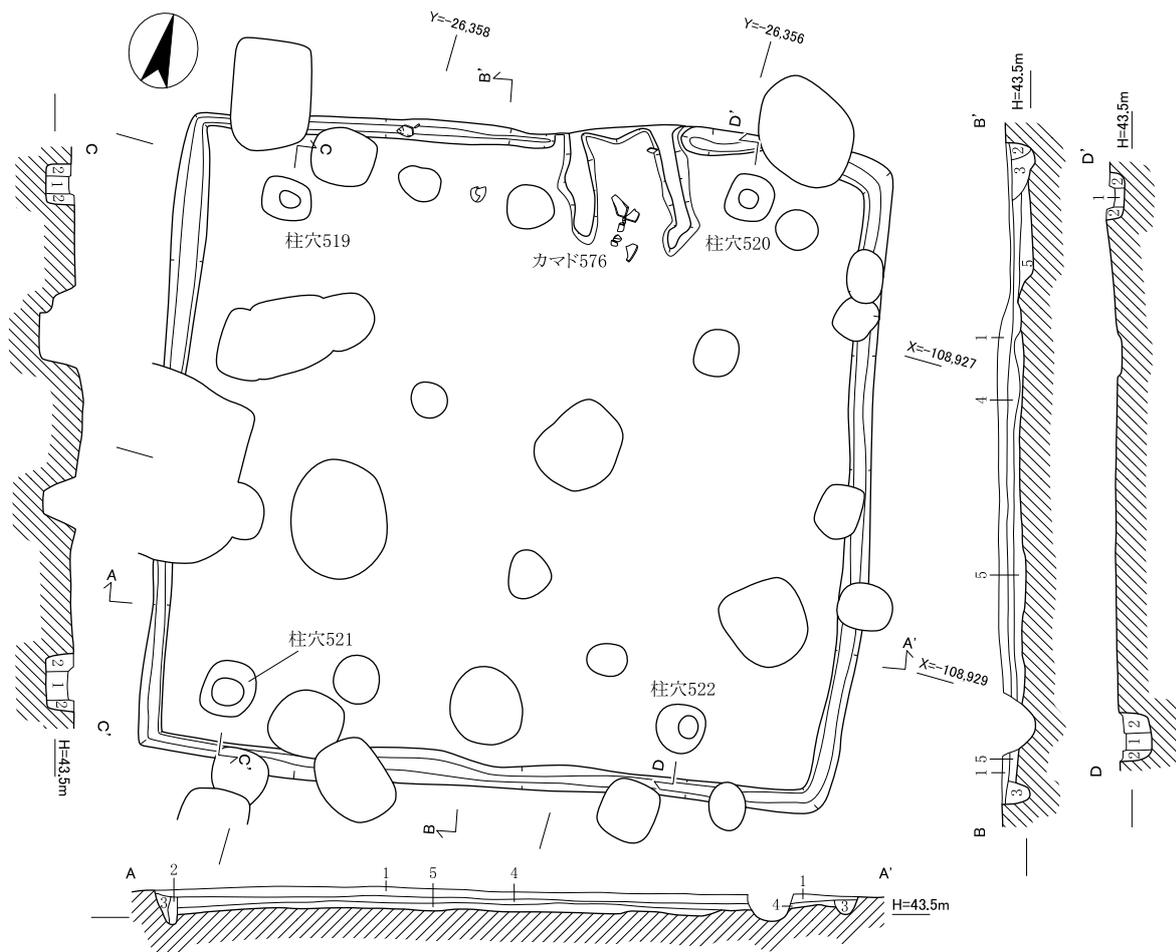
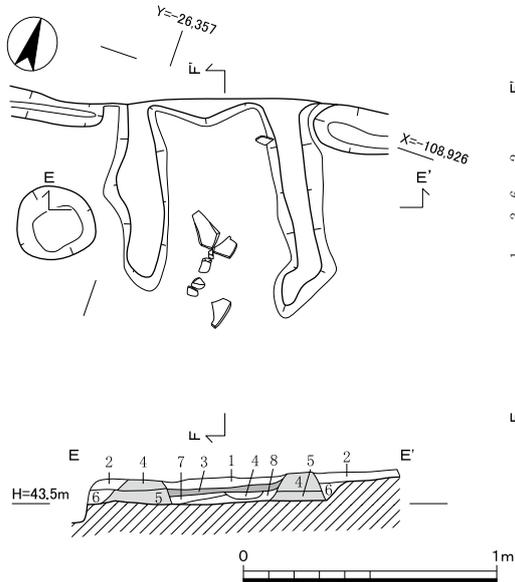


図23 竪穴建物317実測図 (1:50, 1:30)

長方形を呈する。一辺の長さは東西4.8m、南北4.0mを測る。方位は北に対して15°西へ振れる。支柱穴は認められなかった。壁溝は西半部で検出し、深さは最も深い西辺で0.25mを測り、断面観察では板の痕跡と思われる垂直方向の土の堆積も確認した。貼床は0.05~0.1mの厚さを測る。カマドの前面の貼床は、他の部分とは異なりにぶい黄橙色の粘土を用いている。



カマド576



Aライン・Bライン

- 1 10YR2/3黒褐色 砂泥
- 2 10YR3/3暗褐色 砂泥
+10YR4/4褐色 砂泥ブロック少量混じり
- 3 10YR3/4暗褐色 砂泥
+10YR4/4褐色 砂泥ブロック混じり(壁溝)
- 4 10YR5/2灰黄褐色 砂泥(貼床1)
- 5 10YR7/2にぶい黄橙色 砂泥
+10YR3/2黒褐色 砂泥ブロック φ5cm礫混じり(貼床2)

Cライン

- 柱穴519
- 1 10YR2/2黒褐色 砂泥
- 2 10YR3/2黒褐色 砂泥
- 柱穴521
- 1 10YR2/2黒褐色 砂泥
- 2 10YR2/2黒褐色 砂泥
+10YR4/2灰黄褐色
砂泥ブロック中量混じり

Dライン

- 柱穴522
- 1 10YR2/2黒褐色 砂泥
- 2 10YR3/2黒褐色 砂泥
- 柱穴520
- 1 10YR2/2黒褐色 砂泥
- 2 10YR2/3黒褐色 砂泥

- カマド床土
- カマド構築土

Fライン

- 1 7.5YR6/6橙色 焼土混じり
土器片少量混じり(被熱したカマド天井崩落土)
- 2 7.5YR6/6橙色 焼土(カマド床土)
- 3 7.5YR5/6明褐色 微砂(支柱痕跡?)
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色 砂泥(カマド構築土)
- 5 10YR3/2黒褐色 砂泥
- 6 10YR6/4にぶい黄橙色 砂泥
φ1~4cmの礫少量混じり (カマド掘形埋土)
- 7 10YR3/2黒褐色 砂泥
- 8 10YR3/3暗褐色 砂泥、10YR6/3
にぶい黄褐色 砂泥ブロック (堅穴建物床面)

Eライン

- 1 10YR2/3黒褐色 砂泥 土器片少量混じり
(被熱したカマド天井崩落土)
- 2 10YR3/3暗褐色 砂泥+7.5YR6/6橙色 焼土(カマド崩落土)
- 3 7.5YR6/6橙色 焼土混じり(カマド床土)
- 4 10YR5/3にぶい黄褐色 砂泥
φ1~3cmの礫少量混じり (カマド構築土)
- 5 10YR3/4暗褐色 砂泥
- 6 10YR4/4褐色 砂泥
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色 砂泥 (カマド掘形埋土)
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色 砂泥

図24 竪穴建物341実測図 (1:50, 1:30)

北壁際ではカマド575を検出した。基底部幅は0.5m、袖部の長さ0.45mを測る。掘形は東西0.85m、南北0.65mを測る。

竪穴建物341（図24、図版7） 調査区中央部で検出した。平面形は方形を呈する。一辺の長さは東西4.7m、南北4.5mを測る。検出面から床面までの深さは0.08mある。方位は北に対して12°西へ振れる。支柱穴は認められなかった。壁溝は、幅0.15～0.25m、深さは深い西辺で0.12～0.25mを測る。西壁の壁溝の断面観察では板の痕跡と思われる垂直方向の土の堆積を確認した。貼床は上下2層あり、それぞれ約0.05～0.1mの厚さを測る。下層の貼床2は径5cm程度の礫を含むが、上層の貼床1には礫が含まれず、床面の仕上げとして敷かれたものと思われる。床面上では支柱穴の柱穴519～521を検出した。掘形は、平面形が隅丸方形で、径0.35～0.4m、深さは0.18～0.2mを測る。柱痕跡は、径0.12～0.2mである。出土した遺物には7世紀中ごろの土師器杯・甕がある。

北壁際ではカマド576を検出した。北壁中央のやや東寄りに位置する。カマドは北壁に直行せず、焚口側で東へ振っている。基底部幅は0.9m、袖部の長さ0.9mを測る。掘形は東西1.1m、南北0.9mを測る。

竪穴建物369（図25、図版8） 調査区北東部で西壁と南壁の一部を検出した。後世の削平によって、壁の立ち上がりは失われており床面で検出した。平面形は方形を呈すると思われる。西壁は長さ3.2m以上で、北側は調査区外へと続く。南壁の東半は溝351によって失われており、残存長は3.8mである。方位は北に対して15°西へ振れる。支柱穴と壁溝は認められなかった。貼床は南壁付近の一部で検出した。

竪穴建物422（図26、図版8） 南壁際の中央部で検出した。竪穴建物の北壁と東西壁を検出した。平面形は方形を呈すると思われる。東西6.5m、南北1.5m以上を測る。南側は調査区外へと続く。全容は不明であるが、今回検出した竪穴建物で最も大きい竪穴建物と思われる。検出面から床

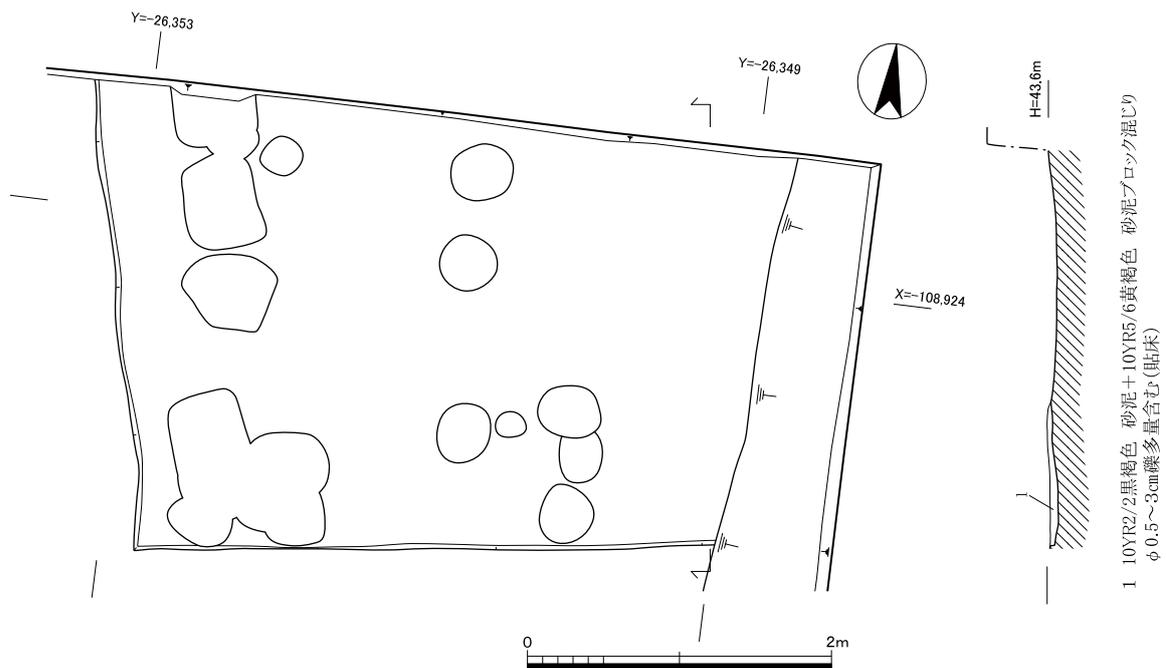


図25 竪穴建物369実測図（1：50）

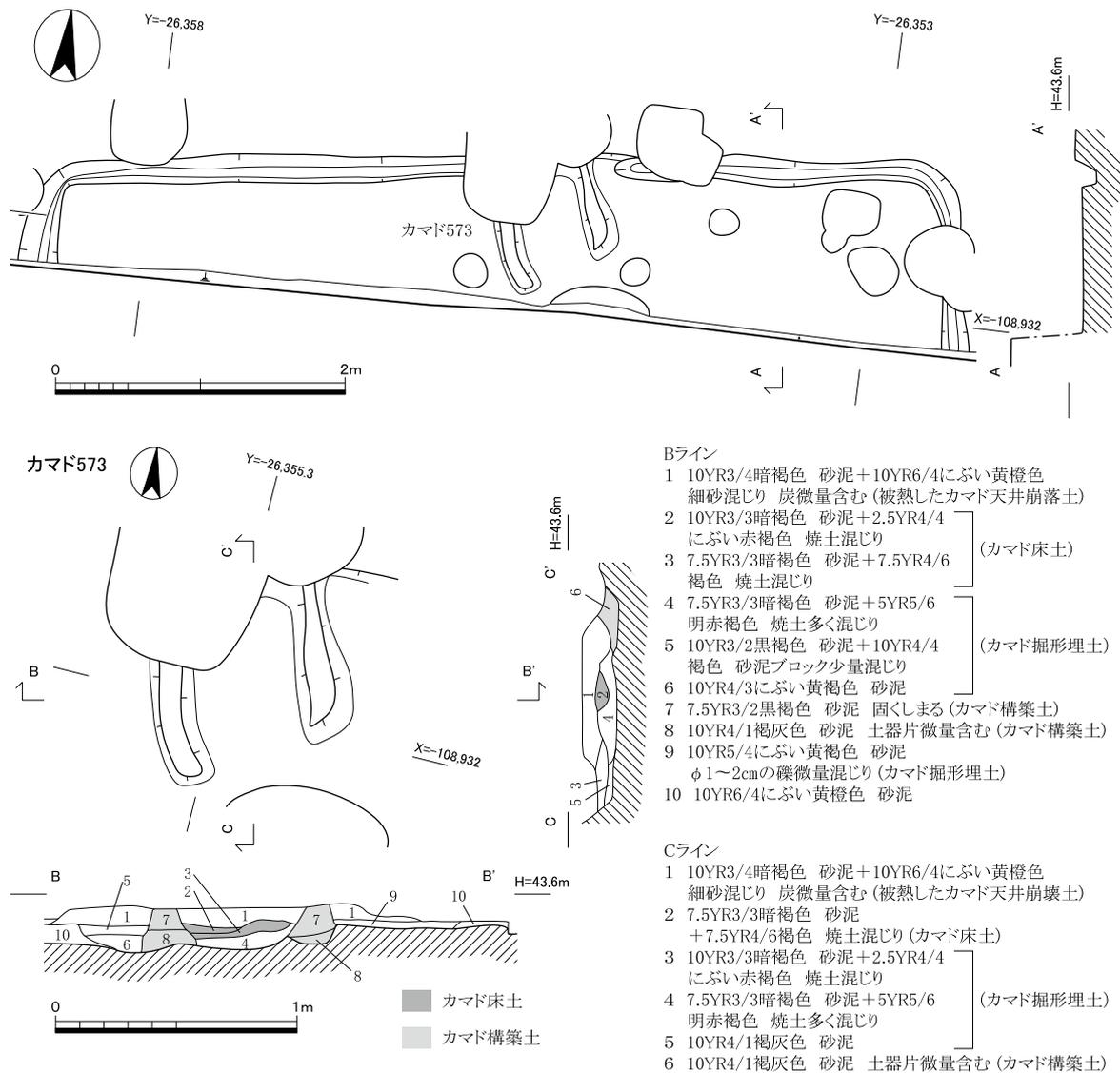


図26 竪穴建物422実測図(1:50, 1:30)

面までの深さは0.2mある。方位は北に対して10°西へ振れる。主柱穴は認められなかった。壁溝は、幅0.15~0.3m、深さは0.1~0.3mを測る。貼床は0.1~0.2mの厚さを測る。出土した遺物には7世紀中ごろの土師器杯・甕がある。

北壁際ではカマド573を検出した。北壁中央のやや東寄りに位置する。カマドは北壁に直行せず、焚口側で東へ振っており、竪穴建物341と同じである。基底部幅は0.9m、袖部の長さ0.9mを測る。掘形は東西1.1m、南北0.9mを測る。

土坑503(図13・15) 南壁中央部で検出した。竪穴建物422の埋土上面から成立する。検出長は南北0.18m、東西0.7mを測り、南側は調査区外へと続く。7世紀代の須恵器の高杯脚部が出土した。

溝5(図13・15) 調査区東部で検出した。北西から南東方向の溝で、検出長約10m、最大幅0.45m、深さ約0.1~0.2m。溝底は北西から南東側に低くなる。1区で検出した溝5の南東側の延長部。竪穴建物341と竪穴建物369の間を縫うように通っており、集落内の排水施設と考えられる。

4. 遺物 (図27・28)

今回の調査で出土した遺物には土器類・瓦類がある。出土遺物の大半は土器類が占め、瓦類では平瓦の小片が数点出土している。

時代別にみると、飛鳥時代が最も多く、次いで平安時代となり、奈良・室町時代の遺物は少量である。鎌倉時代の遺物は出土していない。以下では、調査区別、出土遺構ごと、時代順に述べる¹⁾。1～7が1区出土、8～20が2区出土である。

1は白色系の土師器皿である。土坑52から出土した。口縁部はやや丸味を持って立ち上がり、端部は上方につまみ上げるようにして丸く収める。時期は平安京・京都土器編年Ⅵ期新段階である。

2は土師器皿である。柱穴91から出土した。平坦な底部から、口縁部は緩やかに立ち上がる。口縁端部はやや屈曲し丸く収まる。色調は白橙色を呈し、胎土は精良で砂粒は含まない。時期は平安京・京都土器編年Ⅴ期中段階である。

3・4は土師器皿である。土坑51から出土した。3は、やや丸味を帯びた底部から口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。4は、口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。3・4は共に、色調は黄橙色を呈し、胎土は精良である。時期は平安京・京都土器編年Ⅴ期中段階である。

5は白磁碗Ⅳ類の底部である。調査区南西部の遺構検出中に出土した。内面は全面施釉、外面は露胎である。時期は12世紀である。

6は須恵器杯B蓋である。落込み167から出土した。口縁部はやや角度を持って立ち上がり、口縁端部は面を持ち丸く収まる。内面のかえりは小さく、口縁端部よりも上で収まる。焼成はやや軟質で、胎土には3mm大の長石を多く含む。時期は飛鳥Ⅳ期である。

7は平瓦である。土坑52から出土した。凹面の布目は目が細かく、整っている。凸面には幅は2cmのへら状工具による縦方向のタタキ痕がある。焼成は、やや軟質の須恵質である。胎土には3mm

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
飛鳥時代	土師器、須恵器、瓦		土師器4点、須恵器4点、瓦1点		
奈良時代	土師器、須恵器		須恵器1点		
平安時代	土師器、須恵器、白磁		土師器8点、白磁1点		
室町時代	土師器		土師器1点		
合計		16箱	20点(2箱)	0箱	14箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

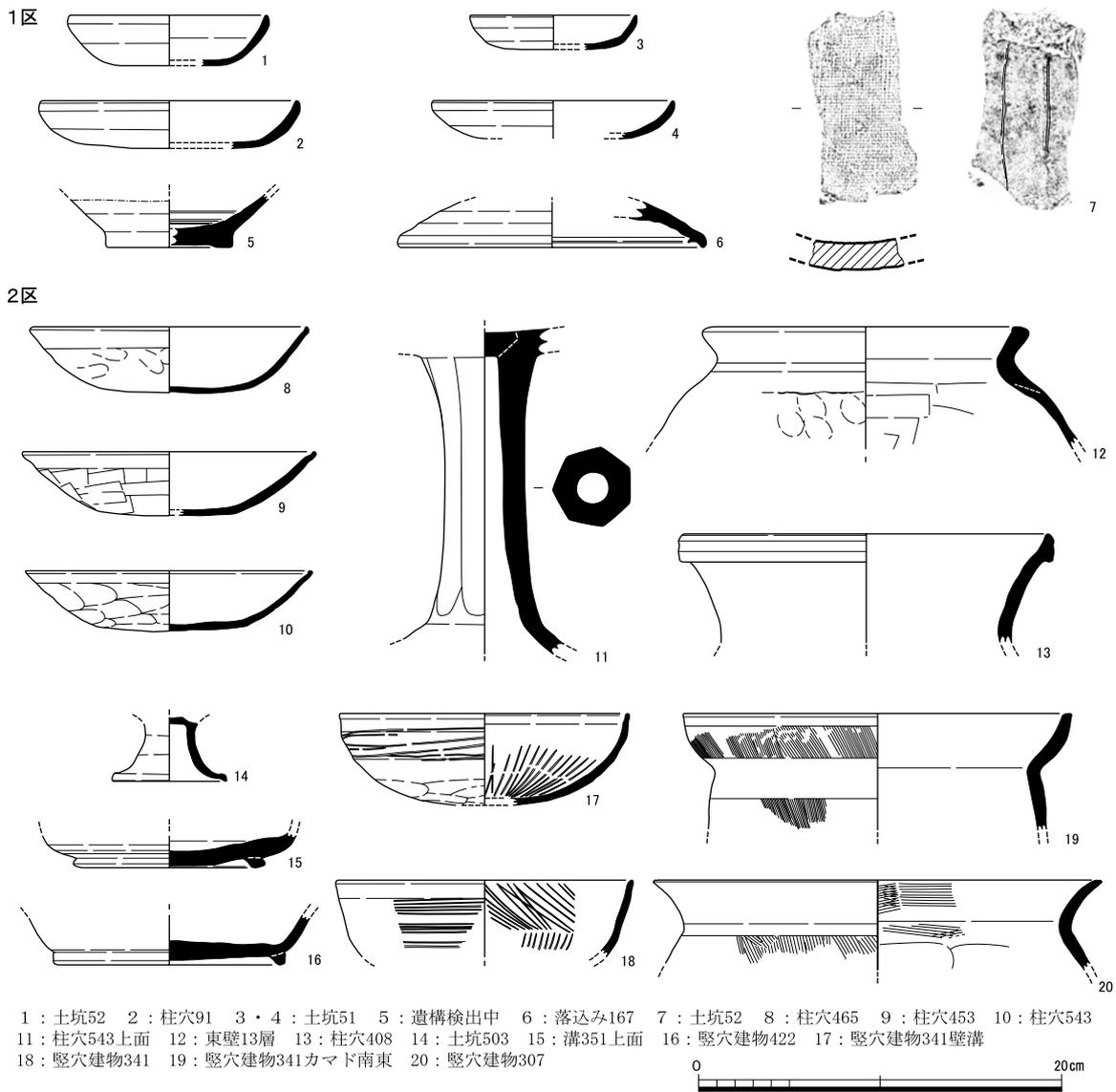


図27 遺物実測図（1：4）

大の長石を少量含む。

8は土師器碗Aである。柵4の柱穴465から出土した。底部はやや丸味を帯びた平底で、体部は開き気味に立ち上がる。口縁部はわずかに屈曲し、口縁端部は小さく肥厚する。時期は平安京・京都土器編年Ⅱ期古段階である。

9は土師器杯である。柵3を構成する柱穴453から出土した。平坦な底部から体部は開きながら立ち上がり、口縁部はわずかに屈曲し、口縁端部は小さく上方に突起させて収まる。体部外面はヘラケズリ、口縁部にはヨコナデを施す。時期は平安京・京都土器編年Ⅱ期古段階である。

10は土師器杯である。柱穴543から出土した。平坦な底部から体部は開きながら立ち上がり、口縁部はわずかに屈曲し、口縁端部は小さく上方に突起させて収まる。体部外面はヘラケズリ、口縁部にはヨコナデを施す。時期は平安京・京都土器編年Ⅱ期古段階である。

11は土師器高杯の脚部である。柱穴543上面から出土した。脚部には断面八角形の面取りを施す。

12は土師器甕である。東壁13層から出土した。丸味を帯びた体部から頸部は強く屈曲し、短い口

縁部は外反しながら立ち上がる。口縁端部は上方に面を持ち、小さく肥厚する。外面体部は指頭圧痕、頸部と体部の粘土接合痕跡が残る。頸部から口縁部はヨコナデ。内面体部はヘラ状工具によるヨコナデ。胎土には約0.5mmの長石と赤色のクサレ礫を少量含む。



図28 2区柱穴543出土土師器杯

13は須恵器壺である。建物1の南西隅柱の柱穴408から出土した。頸部は開き気味に立ち上がり、口縁部は小さく下垂して面を持つ。時期は8世紀代である。

14は須恵器高杯の脚部である。土坑503から出土した。脚部は短く、裾部の広がり大きい。裾部端部は面を持つ。焼成はやや軟質で、色調は淡い青灰色である。時期は7世紀代である。

15は須恵器杯Bである。溝351の上面から出土した。底部から体部へは丸味を持って立ち上がる。高台は低く、外側に開き気味である。飛鳥Ⅳ期である。

16は須恵器杯Bである。竪穴建物422から出土した。底部から体部へは丸味を持って立ち上がる。高台は低く、ほとんどが剥離している。時期は飛鳥Ⅳ期である。

17は土師器杯Cである。竪穴建物341の北壁溝から出土した。底部から体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は微かに屈曲する。口縁端部は小さく肥厚する。外面底部は横方向にヘラケズリ、口縁部はヨコナデ。暗文は、外面口縁部には疎らに横方向に、内面は放射状に施す。胎土は精良。時期は飛鳥Ⅲ期である。

18は土師器杯Aである。竪穴建物341の埋土から出土した。体部は、外側に開きながら直線的に立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く収まる。暗文は、外面口縁部には疎らに横方向に、内面は2段で放射状に施す。胎土は精良。時期は飛鳥Ⅲ期である。

19は土師器甕である。竪穴建物341の床面、カマド576の南東側で出土した。口縁部は中ほどで屈曲して受け口気味になる。胎土には1～2mmの長石・雲母・クサレ礫が含まれる。

20は土師器甕である。竪穴建物307から出土した。外側に開く口縁部は端部でさらに外反して上方に小さな面を持つ。外面体部はタテハケ、口縁部ヨコナデ。内面体部はヨコナデ、口縁部はヨコハケである。

註

- 1) 遺物の時期は以下の文献による。飛鳥時代はa、奈良時代はb、平安時代はcに拠った。
 - a 西弘海1978 「土器の時期区分と型式変化」：『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ 奈良国立文化財研究所（『土器様式の成立とその背景』真陽社 1986年に所収）
 - b 西弘海1976 「考察 土器」：『平城宮発掘調査報告』Ⅶ 奈良国立文化財研究所（『土器様式の成立とその背景』真陽社 1986年に所収）
 - c 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

5. まとめ

今回の調査では、飛鳥時代から平安時代の集落の変遷が明らかとなった。これまでの周辺調査でも同時期の集落跡が確認されており、今回はその最も東側で確認された調査例となった。京都市作成の遺跡地図に拠れば、調査地周辺の集落遺跡としては、北から村ノ内町遺跡、常盤仲之町遺跡、一ノ井町遺跡、和泉式部町遺跡などがある¹⁾。今回の調査地は、これらの遺跡範囲のちょうど中間に位置しており、空白地帯となっていたその間を埋める成果となった。

以下では、今回検出した遺構の時期的な変遷を整理した後、周辺調査成果を踏まえその意義について述べたい。なお、以下の文章中での調査次数は図8・表1に対応する。

(1) 遺構の変遷

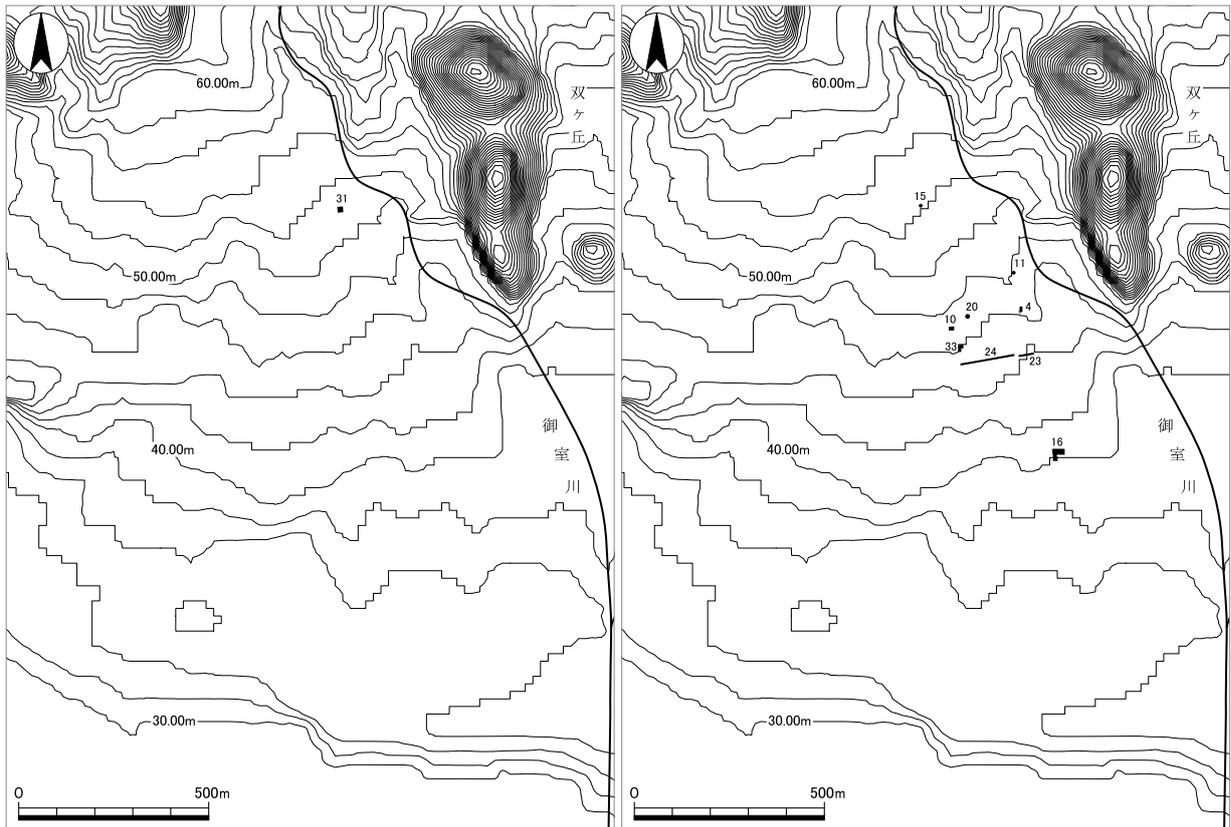
飛鳥時代 この時期の遺構として、竪穴建物307・317・341・369・422と溝5を検出した。竪穴建物は平面形が方形で一辺が約4.5mのものが主となっている。遺存状況がよくない竪穴建物369の除いて作り付けのカマドを持つ。カマドは、北壁の中央よりやや東寄りに作られるものが多く(竪穴建物317・341・422)、袖の方向は壁に直交せずにやや傾けられる。遺物の出土量は多くはないが、竪穴建物341の遺物の出土状況などから7世紀後半の竪穴建物と考えられる。これらの主軸方位は、北に対して10～20°西へ振れるが、周辺調査で確認されている弥生時代から飛鳥時代の竪穴建物も同方位のものが多く。これは調査地の位置する御室川扇状地北東部が北西に高く、南東に低いという地形に沿ったものである。

奈良時代 掘立柱建物1～4の4棟を検出した。これらの主軸方位は、北に対して10～23°西へ振れ、飛鳥時代の竪穴建物とほぼ同方位である。遺物の出土量は少ないが、竪穴建物埋没後にその上面から柱穴が成立していること、9世紀以降の遺構は方位が異なることから、概ね8世紀代と考えられる。調査24では竪穴建物130から飛鳥V期の杯Aが出土しており、調査地周辺では8世紀初頭以降に竪穴建物から掘立柱建物への変換が行われたようである。²⁾

平安時代 2区壁際で柵2～4の3条の柵と溝351を検出した。柵を構成する柱穴からは、9世紀前半の土器が出土している。遺構の主軸方位は、これ以前とは異なり北に対して5～20°東へ振れる。9世紀前半に周辺の地割が変更されたことがわかる。現在の周辺地割は、方位は北を意識した方形区画で、その原型がこの頃に施工されたと考えられる。柵2～3は重複する位置にあり、この他にも多数の柱穴を検出していることから、複数回の柵の建替が存在したことがわかる。溝351の埋没後に柵4が設けられている。同一方向で重複してある柵と溝は、これらが土地境界などの区画施設の遺構と考えられる。現在の土地境界となる水路が、調査区西壁から約2mの位置にこれらの遺構と平行して通っており、9世紀以降、大きな変動がなく引き継がれているものと思われる。

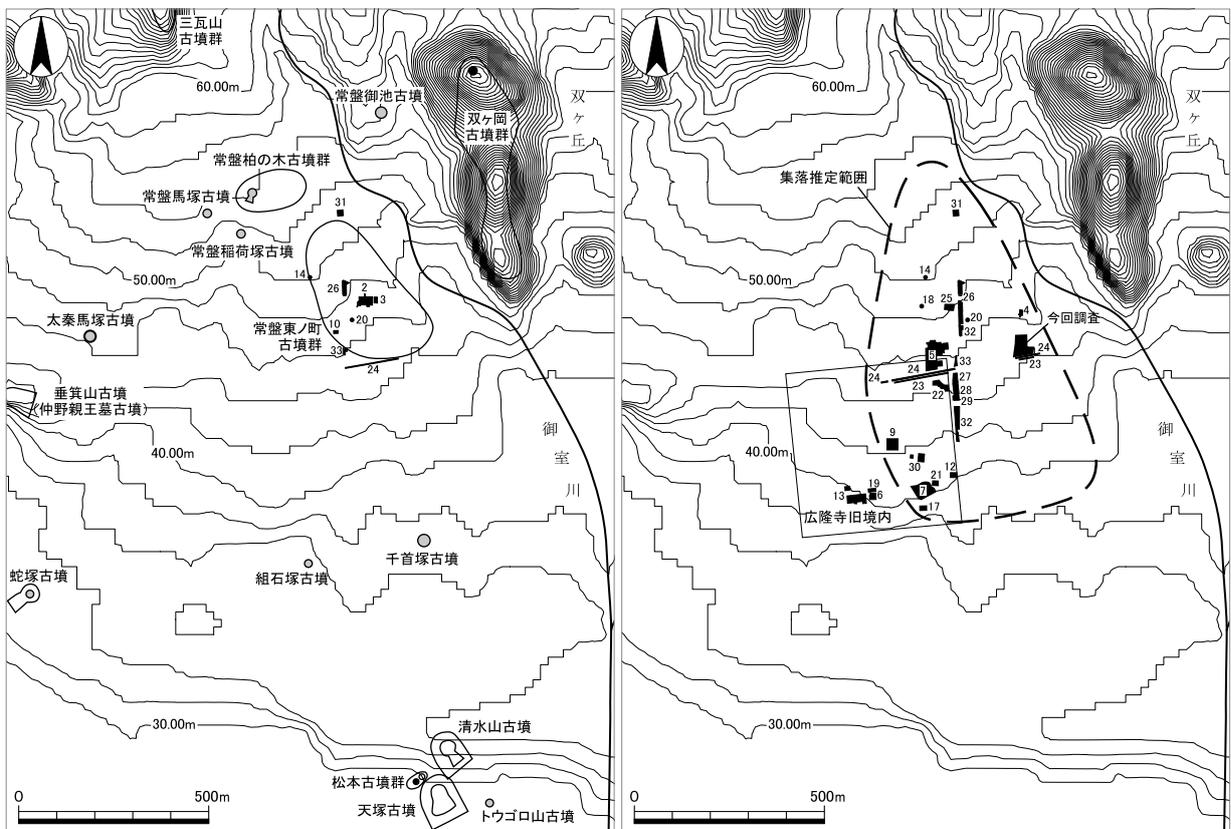
(2) 御室川扇状地北東部における遺跡の展開 (図29)

今回の調査と既往の周辺調査(図8の範囲)を合わせると、これまでに飛鳥時代(6世紀末から



縄文時代

弥生時代から古墳時代中期



古墳時代後期から飛鳥時代

飛鳥時代から平安時代

※ 調査次数は表1に対応

図29 周辺地形と遺構分布変遷図 (1 : 20,000)

7世紀代)の竪穴建物が計64棟が検出されており、今回の調査と合わせて69棟となる。その検出地点は、北端は調査31、南端は調査16、西端は調査23、東端が今回の調査地となり、その範囲は南北約800m・東西約500m、標高40～51mとなる。この範囲の外郭となる地形を見ると、東側には御室川が流れ、西側には北東から南西方向の谷地形が存在する。また南端は現在の広隆寺南限とほぼ重なり、この段差のある段丘の南側では、北から南への傾斜が緩やかな低平な地形となっている。建物遺構の検出範囲は一定の地形的な制約の中に存在することがわかる。この範囲で検出された建物遺構群は、時期ごとに規模の変動は予想されるが、一つの集落を構成するものとする。この集落は、第2章(1)で述べたように御室川扇状地の北東部に位置している。一般には扇状地は、土地が高いため用水の便が悪く、形成している堆積物に礫が多く水が抜けやすいことから、水田耕作には不向きで、特に今回の調査地周辺の扇中央部はその傾向が顕著とされる。実際、既往の調査成果を見ても飛鳥時代以前に集落が面的に展開することはない。図29は、御室川扇状地北東部における縄文時代から平安時代までの遺構地点を、各時代毎に示したものである。以下では、飛鳥時代に集落が形成されるまでの土地利用状況の変遷をみてみたい。

縄文時代 調査31で中期末(北白川C式)の土坑が検出されているのみである。同調査で晩期の土器が出土するが、これ以外は土器もほとんど出土しない。

弥生時代から古墳時代中期 調査23・24で弥生時代中期の竪穴建物が検出され、遺構の検出地点がやや増える。また調査16では、弥生時代後期から古墳時代中期までの竪穴建物が検出されており、時間的に連続する居住域の存在を知ることができる。ここでは、古墳時代中期の竪穴建物は、平面L字形のカマドを持ち、初期須恵器・韓式系土器などが出土することから、渡来系集団が存在したことがわかる。ただし、この渡来系集団は、弥生時代から続く集落に居住しており、先住する在地民との混住であったと考えられる。また古墳時代中期の遺構・遺物は、これ以外の調査ではほとんど確認されていない。これら弥生時代から古墳時代中期までの遺構・遺物の検出地点は、御室川扇状地北東部でも御室川に近い地点に位置しており、比較的生活用水が得やすい場所であったと思われる、その居住域は限定的であったようである。

古墳時代後期 御室川扇状地北東部の土地利用は活発化する。多数の古墳の築造と飛鳥時代に繋がる集落が形成され始める。

嵯峨野の古墳は、立地条件の違いが古墳の規模と対応していることが早くから指摘されている³⁾。すなわち北側の山部では小規模古墳がまとまって群集墳として存在し、中央にあたる山裾から扇状地の高所には円墳を中心とした中規模の古墳が、南側の扇状地の低所には前方後円墳などの規模の大きい古墳が存在する。御室川扇状地北東部でもこの傾向はほぼ同じであるが、扇中央部に群集墳である常盤東ノ町古墳群が形成されること、独立丘陵である双ヶ岡の頂上に比較的規模の大きな円墳の双ヶ岡1号墳が造営される点が、先に述べた嵯峨野の古墳群の一般的な傾向と異なる。

調査2では、常盤東ノ町古墳群を構成する3基の円墳の調査が行われている。円墳はいずれも直径約15mで、TK217型式の須恵器が出土している。調査10でも古墳の周溝と考えられる溝が検出されており、古墳群が一定の広がりを持っていたことがわかる。これに近接する調査5では24棟

の竪穴建物が検出されており、TK43・209・217型式の須恵器が出土している。集落の形成は、6世紀の後半に常盤東ノ町古墳群とほぼ同時期、あるいはやや先行して形成されたことがわかる。

飛鳥時代 古墳の築造は7世紀の前半には終息し、御室川扇状地北東部には竪穴建物の集落が面的に展開し、広隆寺も造営される。御室川扇状地北東部における居住域としての土地利用が本格化する。広隆寺は、秦河勝が推古11年（603）に聖徳太子から仏像を拝領したことを契機として創建された寺院である。創建当初の寺域や伽藍配置などの具体的な様子は不明であるが、調査6では基壇と考えられる遺構が検出されており、この付近に堂舎が存在したことは確実である。集落は、この広隆寺の背後にあたる北側に展開しており、その形成に秦氏が関連したことは容易に窺える。

（3）結語

以上のように、御室川扇状地北東部における土地利用の画期は、6世紀後半の古墳時代後期にある。常盤東ノ町古墳群の築造と調査5で確認された集落の形成という、扇央部の開発である。扇央部は、一般に用水が得難いことが短所とされるが、その点が克服されれば、台地状地形が広がるため一定規模の集落が展開するのには適しているといえる。これまでの調査では確認されていないが、6世紀後半の集落の発生と続く7世紀の集落の拡大には、灌漑施設の敷設と整備を伴った筈である。この時期の土木技術の飛躍が扇央部の開発を可能にしたと考えられる。常盤東ノ町古墳群と集落が隣接するという特異なあり方は、開発者とその墓所として理解することもできよう⁴⁾。

調査地周辺には、嵯峨野地域の首長墓と考えられる古墳が2基存在する。蛇塚古墳と双ヶ岡1号墳である。蛇塚古墳は前方後円墳で、巨石を用いた石室は巨大で全長17.8mを測る。墳丘は失われているが全長75mと推定されている。被葬者を秦河勝とする説も有力である。双ヶ岡1号墳は、標高116mの双ヶ岡一の丘の頂上に存在する。直径45mの円墳で、石室は全長15.1mを測り、南西方向すなわち太秦方面に開口する。この2つの古墳の時期については諸説あるが、6世後半から7世紀初頭と考えられている⁵⁾。今回の調査地を含む集落は、この2つの古墳に挟まれる位置にある。先述したように、双ヶ岡1号墳の位置は、嵯峨野の首長墓の立地としては特異な丘陵の頂上にある。この位置からは、調査地を含む飛鳥時代の集落や広隆寺を見下ろすことができ、双ヶ岡1号墳と広隆寺の造営、集落の形成が一連の流れのなかにあったことが想像できる。

6世紀後半に成立した集落は、広隆寺が造営される7世紀に入ると面的に拡大し、8世紀初頭前後に竪穴建物から掘立柱建物に変化しながら継続していく。平安時代になると、北方位を意識した地割の変更が行われる一方、遺構の検出地点数も減少していき、次第に広隆寺周辺へと集約されていくようである。平安京では、下級官人として多くの秦氏が登用されていることが知られているが、調査地周辺の平安時代前期の変化が平安京の造営と関連する可能性もあり、今後の検討課題である。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳 第8版』京都市民文化局 2009年

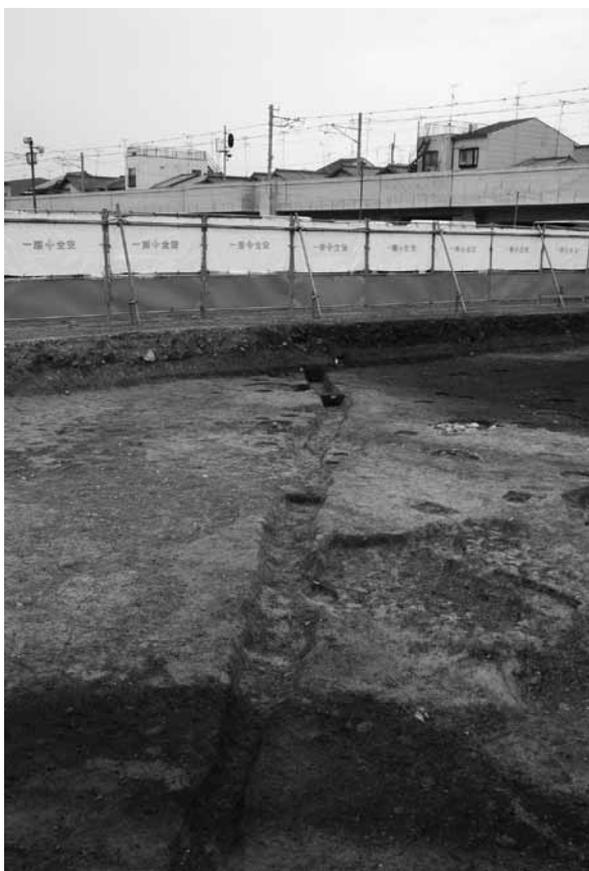
- 2) 調査24の報告書では、竪穴建物130から出土した須恵器杯Aの時期を平城Ⅳ期としているが、形態から飛鳥Ⅴ期と考えられる。
- 3) 田辺昭三「首長墓の系譜」『京都の歴史』1 学芸書林 1970年
- 4) 『扇状地の考古学 愛知・犬上の古代文化』安土城考古博物館 2006年
古墳時代後期から飛鳥時代の扇状地の開発は、他地域でも確認されており、滋賀県愛知郡の犬上川扇状地の開発には愛知秦氏の関与が指摘されている。
- 5) a 広瀬和雄「山城・蛇塚古墳を巡る二、三の問題」『国立歴史民俗博物館研究報告 第178集』2013年
b 白石太一郎「太秦蛇塚古墳の造営時期－前方後円墳の造営停止時期に関連して－」『橿原考古学研究所論集 第十六』八木書店 2013年
c 奥村清一郎「嵯峨野の前方後円墳」『京都考古』72号 京都考古刊行会 1993年
d 丸川義広「京都盆地における古墳群の動向」『田辺先生古希記念論文集』田辺先生古希記念の会 2002年

広瀬氏は、双ヶ岡1号墳を6世紀後半、蛇塚古墳を6世紀末としている。一方、白石氏は横穴式石室の形式から、蛇塚古墳を石舞台式で7世紀前半、双ヶ岡1号墳を天王山式とし蛇塚古墳に先行するとしている。嵯峨野地域における首長墓間の石室型式の違いは、嵯峨野地域には有力なグループが複数存在し、それが反映したものであるとする。奥村氏・丸川氏もそれぞれの観点から、嵯峨野地域に複数の首長墓系譜が並存したことを指摘している。これらの首長墓と集落居住者を結びつける発掘資料は存在しないが、その位置関係から一定の関係性を想定してよいと考えられる。

圖 版



1 1区全景（北から）



2 1区溝5（北西から）



3 1区溝5断面（南東から）



1 1区土坑51半裁 (南から)



2 1区土坑52 (北から)



3 1区溝138 (西から)



4 1区落込み167 (東から)



1 2区全景 飛鳥時代(西から)



1 2区全景 奈良時代から平安時代（西から）



2 2区掘立柱建物1（北西から）



3 2区柵1・5（北東から）



1 2区溝351 (北東から)



2 2区柵3柱穴453 (東から)



3 2区柱穴543 (東から)



1 2区竪穴建物317（北東から）



2 2区竪穴建物317カマド575（南東から）



3 2区竪穴建物307（南西から）



1 2区竪穴建物341（北西から）



2 2区竪穴建物341カマド576（南西から）



3 2区竪穴建物341北壁溝土器出土状況（南東から）



1 2区竪穴建物422（北西から）



2 2区竪穴建物422カマド573（南東から）



3 2区竪穴建物369（東から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ときわひがしのちょうこふんぐん							
書名	常盤東ノ町古墳群							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2014-4							
編著者名	南 孝雄							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2014年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ときわひがしのちょう 常盤東ノ町 こふんぐん 古墳群	きょうとうしうきょうく 京都市右京区 うずまさいちのいちよう 太秦一ノ井町 41番地55・56 ・60	26100	874	35度 01分 05秒	135度 42分 40秒	2014年2月 17日～2014 年4月11日	456㎡	建物建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
常盤東ノ町 古墳群	古墳	飛鳥時代	竪穴建物、溝	土師器、須恵器、瓦		飛鳥時代に成立し 奈良時代まで続く 集落跡を確認した。		
		奈良時代	掘立柱建物、柵	土師器、須恵器				
		平安時代	柵、土坑、溝、落 込み	土師器、須恵器、白磁				
		室町時代	土坑	土師器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-4

常盤東ノ町古墳群

発行日 2014年8月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961